群鴉嘖嘖亂蟲哦　稻穗蕎花秋色多
村老不レ關天下事　停レ節畦畔見二豐禾一

群鴉嘖嘖として亂蟲は哦ひ、稻穗蕎花、秋色多し。
村老關せず天下の事、節を停めて畦畔に豐禾を見る。

結句、節を畦畔に停めて豐禾を見る。村老は世の中がどうならうと一向無關心の樣子だと言ふのである。

以上、昭和十六年辰巳の夏より秋の初めにかけての山莊清居の間に前後四十八詩を得た。この年は時局柄しば〳〵東京に呼出されたがために、僅かに兩回淺間登りを試みた他は、常に山莊に蟄居して山登りの快を貪ることが出來なかつたのであるが、十月十七日より九日に至る三日間の休暇に、萬障を排して盛秋に於ける高原の風光を探るべく山莊の人となり、一日は晴に乘じて夫妻相携へて碓氷に觀楓し、一日は大雨を冒して輕鐵により北輕井澤に登り、六里ヶ原の秋を探つて左の三首を得た。

今、當時の日記を寫して此の項を終ることゝしたい。

一　入莊

昭和十七年十月十七日から十九日へかけて盛秋の休暇續きと晴天に惠まれたので、緊迫せる國際情勢を後に輕井澤山莊に清寂の境に浸らん爲め、十六日早天女中一名を伴つて目白五禱莊を出で、上野發八時半の準急に搭じて、沿道の豐禾と遠山の翠黛を眺めつゝ碓氷を越へて輕井澤高原に上り、正午を過ぐる十分、沓掛の驛に下車した。幸ひ土屋君の出迎へあり、用意の自動車で直に南原の恰々山莊に入つた。庭中の楓樹は霜を帶んで或は赤きこと血の如く、或は黃、綠相半して一層の風情を添へ、青松は依然霜を凌いで本來の面目を露はし、白樺の小林は風にゆれて且つ蟲々たり。試みに階上の書齋に入つて窓外を望めば落葉片々として切りに秋を報ずるかの如くである。

夜に入つて早寢するに、忽ち門前囂々の聲あり、起つて車の方林中を窺ふに、月出でざるに一點紅あり、十時を過ぎて山本大工、來訪して曰く、島中氏の邸燒くと、果然島中邸の火災なりしを知つたのである。須臾にして再びもとの靜に歸し、直に睡りに落ち、明くれば十七日、天亦快晴、淨机に對して『南方問題に關する協力』の經緯に就て所感を記し、終つて十一時六分、沓掛着の家妻及女婿菅夫妻を驛頭に迎へ十一時四十分山莊に返つた。

昨車中永久某君著す所『道元禪師の宗教』を讀み禪師賦する所の山の一絕

古佛修行多在レ山、春秋冬夏亦居レ山。
永平欲レ慕古蹤跡、十二時中常在レ山。

に攀ぢて、

一　道元禪師「山の七絕」に次す

世界を見渡しつゝ

又探二秋色一上二高山一　翠壁紅楓一面山
非レ學二道元老師句一　人間至樂在レ居レ山

又秋色を探つて高山に上り、翠壁紅楓一面の山。

道元老師の句を學ぶに非らず、人間の至樂は山に居るに在り。

と歌つて見た。境は到らざるも自然に出た自己の聲であると申すことが出來る。此の日、朝の溫度華氏四十二度、正午同五十二度。

二　碓氷觀楓

午食後、一時十五分山莊を出で夫妻竝に菅夫婦四人にて島中氏別莊火災の跡を弔ひ一路、輕井澤驛に出でて市村郵便局長を拉して東導となし、新輕井澤街道を進みて碓氷峠の頂に到り、熊野神社に展し、日本武尊や辨慶の舊蹟に賽し、社前に休憩の後、見晴臺に日暮前の大觀を了し、其れより觀光道路に據つて紅楓を賞じつゝ下山、市村局長と別れ夕暗を衝いて山莊に入つたのは午後六時十分であつた。一浴ビールの一杯を傾け夫妻、菅夫婦と四人栗飯を飽喰しつゝラジオ・ニュースを傾聽した。東條陸相が御召に依つて組閣の大命を拜したことを知つた。到るべき秋が到つたの感じである。玆に順調なる組閣を終へて一路國策の完遂に邁進せんことを祈る次第である。

日本武尊の碑に刻せる

ありし世にかへり見してう碓氷山
今も慕しき吾妻路の空

の詠歌や、辨慶を偲ぶ

山みちは寒く淋しき一つ家に
夜毎にしみる百代おく霜

抔も旅人の旅愁を惹くものがあつた。

三　雨の六里ケ原

十八日朝の氣象通報は夕刻より小雨あるべし位の知らせであつたのと、雲の隙き間から陽光を窺へるので先づ差したることなしと斷じて吾等夫妻に菅夫妻を加へて一行四人、七時半山莊を出で八時半新輕井澤發の草津電鐵に搭じ、青松紅樹の裏を迂回して小瀨に上り、國境平に至る頃より天雨を降らせるも、沿道の秋色最も大意に佳なり、十時北輕井澤に及ぶ頃、小雨は大雨となり、登山を斷念して驛前の小亭に四人暖を取り携ふる所の行厨を開いて午餐をしたため、十二時半草津よりの電車に搭乗して、新輕井澤に引返し、秋雨蕭々の道を離山麓に出で南原の山莊に辿り着いたのは午後の三時であつた。雨の六里ケ原への往復、車窓の遠望も亦一快である。

一　六里ケ原の秋を探りて

霜滿二峯巒一落葉殘　金吹蕭瑟雨聲寒
秋深六里原頭路　黄葉錦楓窓外看

霜は峯巒に滿つて落葉殘し、金吹蕭瑟雨聲寒し。
秋は深し六里原頭の路、黄葉錦楓窓外に看る。

車中俗客鷹到して靜かに想を錬るに便ならず、屋かに個中消息の一端を洩らすのみである。入莊、直に火を暖爐に點して濕衣を乾しつゝ、三時半のラジオ・ニュースに依つて東條新内閣の顔振が判つた。

首相が陸内兩相を兼攝せしことは國内體勢整備統一の點より至極と首肯され、東郷大使の外相就任も時局柄、其の人を得たりとの感があり、島田大將の海相就任も當然の順序であり、賀屋大藏、岸商工の兩椅子も新内閣の若さを示し、寺嶋中將の遞信兼鐵相も恐らく適任たるべく、岩村、橋田、井野、小泉、鈴木五相の留任も大體其の要を得てゐるのである。之を要するに新東條内閣は時勢の急迫に依つて生れた産物であり、人をして一段の緊張を覺へしむるのである。時に秋雨蕭々として軒檐を打ち、神氣澄然、男子の雄心を鼓吹するものがある。

四　雨の山莊

夜に入つて雨猶已まず、寒は加つて檢溫器は華氏四十度を下つた。乃ち爐に火を點し、讀みかけの『道元禪師の宗教』を繙ぎ、境は靜かに神は澄んで、覺へず深更に及んだのであつた。

道元が後嵯峨院樣から紫衣を賜はらんとし再三拜辭するも許されず、竟に之を受けて然かも竟に用ゐず、偈を作つて上謝したのに云ふ、

永平雖二谷淺一、勅命重重重、　卻被レ笑二猿鶴一、紫衣一老翁

も面白し、又最後の教誨とも申すべき

一には欲を少くする、二には足るを知る、三には寂靜を樂しむ、四には精進を勤む、五には妄念せず、六には禪定を修す、七には智慧を修す、八には戲論せず。

の如き以て吾人終生の規箴とすべく、その五十四歳の壯齡を以て天壽を終らんとするや、

五十四年、照二第一天一、打二箇跩跳一、觸破大千一、咦、渾身無二著處一、活陷二黄泉一、

と一喝して入寂せし彼の心境も亦羨望の極みである。

仍つて又惡詩を捻出して見た。

三　山莊の夜雨

世界を見渡しつゝ、

山莊斯夕絕二塵情一　窓外時聞點滴聲
境靜神澄人不レ睡　圍レ爐終夜對二燈檠一

山莊斯の夕塵情を絕ち、窓外時に聞く點滴の聲。
境靜かに神は澄んで人睡らず、爐を圍んで終夜燈檠に對す。

五　快晴の半日

昨日の雨天に引換へ、朝來快晴、空に一點の雲翳なく正しく秋天一碧である。曉起又爐火を擁しつゝ、庭前庭後に對するに陽光は燦として樹林を射、碧は愈〻碧に、紅は愈〻紅、雜草已に枯伏して白樺の小幹は蠱として長槍の如く、落葉の松は半ば黃なり。偶〻微風來つて落葉片々、地に委するの處、最も風情あり、起つて窓外を西に望めば淺間の靈山は其の溫雅なる姿態を露呈し、而かも一道の白煙は天を衝いて胸中の滿々たる氣魄を示してゐる。吾れ茅屋を此の南原の一角に結んでから玆に七閱年、高原の盛秋を味はんとして常に俗累に煩はされ、曾て之を試みたことがなかつた。幸に休暇續きの此の三日を利用し塵緣を截斷して、老婦を拉して始めて此の勝景に接するを得た。入山の卽夜に近衛第三次內閣の辭職となり、東條陸相を首班とする戰時內閣の成立を見て、皇國の進むべき道は一層明白となつた。此の機會に塵情を絕して大自然に入神するを得る天の恩寵は、斷じて徒爾ではない。餘生を君國に捧ぐるの身心と熱情は儼として猶ほ存してゐる。曩に前內閣に於て南方問題の重要性に鑑み、之が遂行に協力を求められた私として、新內閣が同じ態度を以て私に對する限り、固より一身を拋つて之に協力することを辭するものではない。

六　山を下らんとして

快晴の半日を山莊の淸寂境に浸り、行李を收めて山を下らんとして、又々、道元禪師が天童の如淨禪師から垂示された句を憶ふ。

國に歸つて化を布き、廣く人天を利せよ。城邑聚落に住む莫かれ。國王大臣に近く莫かれ。
只た深山幽谷に居り。一箇半箇を接得して、吾が宗をして斷絕せしむる勿れ。

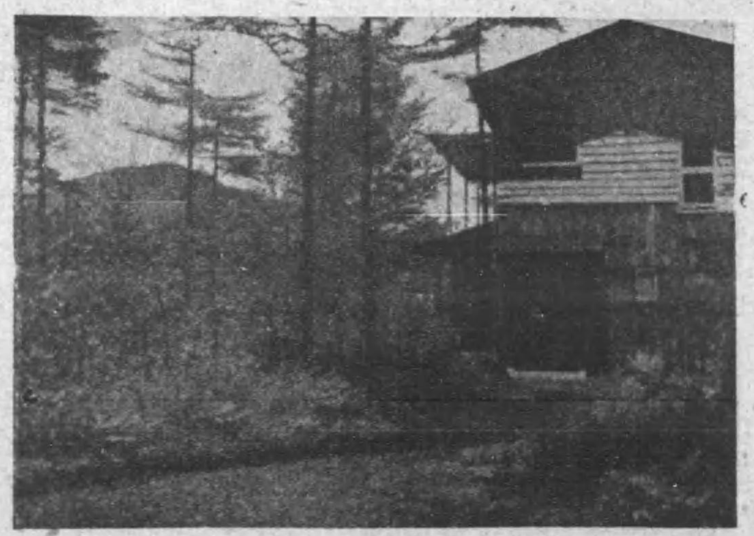
私は眞に人生山居の樂を滿喫して又山を下るのである。山を下つて明後廿一日の夜行にて東京を辭し、廿二日神戸發の郵船富士丸の客となり、臺灣に向はんとしてゐるのである。是より先き長谷川臺灣總督より來信あり、今秋十月の候を期して國內の智識を集め、臺灣の工業化に關する方策、交通の整備擴充に關する方策等を諮問して南方基地たる臺灣の性能を發揮したく臺灣審議會を設置せんとす。愈〻實現の場合には、委員として之が協力を望む旨の依賴狀があつたが、十月に入つて愈〻實行に決したとの報あり、殖產局長態々上京して總督の意を傳へ、又更に去る十五日には右に關する官制の發

布あり、委員として協力を求むるの電報に接し、引續き諸問案をも電報し來る等、屢次の懇電に接したるを以て、萬障を一拋し、渡臺して其の盛意に酬ゆることとしたのである。即ち盛秋山莊の三日、靜の極致を味つた自分は、之より山を降つて新内閣に敬意を表し、直に臺灣に向ひ動の人とならんとするのである。（昭和十六年辛巳秋十月十九日朝輕井澤恰恰山莊に認之）

輕井澤に於ける簡素生活

白樺と井上氏

山百合と井上氏



恰々山莊より淺間山を望む

（上）熱海の讀書
息心海莊の書齋と應接室
（下）同　上
息心海莊の茶室に於ける靜座

熱海に於ける讀書樓

梅咲く息心海莊

秋深き息心海莊

第六　恰恰山莊（下）

五十三首　昭和十七年夏秋六十六歳

一　前書き

昭和十七壬午夏秋恰恰山莊の閒居は、七月初より九月中旬に至る約二ヶ月半、從來にない長期滯在であつた。その閒、所用の爲め歸京したること五回、十六、七日閒は東京の人となつたが、滿二ヶ月閒は山莊の空氣を吸つたわけで、山莊を營んでから今日に至る八ヶ年閒、毎年淸凉の夏を送つて來たが、今年程心地よき生活はなかつた。

昭和十六年の例に倣つて、第一銷夏雜吟、第二初秋閒居に分けてみると、第一は三十四首、第二が十九首、合せて五十三首となつたわけで、昨年の四十八首より五首多く、一昨十五年の二十五首とは倍以上となつてゐる。

昭和十五年は數回の登山を試み、詩もその度に成り、海內煙霞の章に多くの句を讓つたので、山莊の詩囊が輕かつたのは當然である。十六年は多く山莊に閒居したが、それでも兩三回の旅行は忘れなかつた。今十七年は例によつて淺閒に登ること兩回、妙高の赤倉を訪ねること一回の旅行は試みたが、その他は殆んど山莊に靜居したので、得たる雜詠も大同小異、千篇一律で眼新しいものゝ少ないのは

耻かしい次第である。

そこで、まづ蕪詩五十篇といふ八月三十日の句を掲げることゝする。

蕪詩五十篇

林外樵歸入二暮煙　倦レ詩一榻曲レ肱眠
六句幽栖贏二何物　咳唾巴珠五十篇

林外樵は歸つて暮煙に入り、詩に倦んで一榻肱を曲げて眠る。
六句の幽栖何物を贏たる、咳唾巴珠五十篇。

嘗てブラジルに於ける移住制限の憲法制定を緩和せんと急遽南米に赴いて歸つた際に、『嚢中何物を贏たる、唯だ言ふ詩嚢輕し』と歌つたことがあるが、山莊の靜居猶ほ且つ五十篇を贏たのであるから、多くは駄句であるのも止むを得ない。私の詩は境同うして朝夕の所感を文字に並べたに過ぎないが、年々老境に入つて心境益々清澄となるのも自然であつて、謂はゞ早や富士登山ならば八合目、人生の四季でいへば秋も最中である。この八合目に立つた私、人生の秋も最中に入つてゐる私が、現下の長期戰に堪へる爲めに何を青年に訴へんとしてゐるか、形は詩であるが、私の意の在るところを句外に汲んで見ていたゞきたいのである。

二　昭和十七年の夏（消夏絶句）三十四首

私が久しぶりで山莊の人となつたのは七月初旬で、暑さもさして嚴しくはなく、淺間山麓にも人出が少ない。嵐翠が軒を圍んで、飛ぶ鳥も閑なところで、初夏の日を送つてゐると天地はいかにも寥廓として心地よく、還るを忘れる心氣がするのである。そこで第一首が出來た。

一、入莊　七月一日

炎微淺麓少二人攀一　嵐翠圍レ軒孤鳥閑
銷夏逍遙風意峭　乾坤寥廓杳レ忘レ還

炎微の淺麓人攀る少なく、嵐翠軒を圍んで孤鳥閑なり。
銷夏逍遙風意峭く、乾坤寥廓杳として還るを忘る。

七月五日の夕方であつた。フト眼を上げて外を望むと、淺間の頂きには白雲がめぐつて居り、下を見れば山莊の邊は草が繁つて、徑も微かである。入浴後の私の耳に物音が聞こえるので、ハテお客人でも見へたのかなと覗いてみると、何のことだ、雙雙の蝙蝠がバタ〳〵と軒下を飛ぶのであつた。

二、檐を涼めて飛ぶ

淺間峯頂白雲圍　恰恰莊邊一徑微

浴後開レ窓疑二客到一　雙雙蝙蝠掠レ檐飛

淺間峯頂白雲圍み、恰恰莊邊一徑微なり。

浴後窓を開いて客の到るを疑へば、雙雙の蝙蝠檐掠めて飛ぶ。

私の好きな花の一つに山百合の花がある。嘗て燒岳に登つた際、岩石の磊々たる間に、誰に見せようともなく山百合が美しく咲いてゐるのを見て一句ものしことを思ひ出すが、東北の親戚からその球根を貰つて山壯に植へてから數年になる。七月上旬ではまだその花は見られないが、小さい蕾が既にふくらみかけてゐるのも亦詩題である。

三、山百合の花　同日

山百合花看欲レ開　啼鶯依レ舊作二詩媒一

喜レ開移レ步恬レ驚鳥　淵默無レ言按レ句回

山百合の花看て開かんとし、啼鶯舊に依つて詩媒と作る。

開を喜び步を移して鳥を驚かすを恬れ、淵然言無く句を按じて回る。

山百合の花はまだ開かないが、啼く鶯は例によつて私の作詩の媒介となつて呉れる。そこで少しの暇に散步をするのであるが、閒な一刻を偷み徑を步いて行くと鳥を驚かすのが氣の毒になつて來る。結局、私は默つて句を按じて回つて來て終ふといふのである。言葉を換へていふと、山百合の花は未だ開かないが、早く開いて貰ひたい、今のところは鶯で我慢をしてゐる私だといふのである。

だが、さういふ私は又次のやうな詩も作るのである。

四、『中亞風雲一篇』を草了して即ち賊す　七月六日

炎涼圏外意從容　倦レ曲黃鶯偃レ地松

中亞風雲收二一局一　天南何處卓二孤筇一

炎涼圏外意は從容、曲に倦むの黃鶯地に偃るの松。

中亞の風雲一局に收め、天南何れの處にか孤筇を卓せん。

皇軍の戰果は太平洋遙か米洲の東海岸より西は印度洋を歷し、陸に於てもビルマを制壓して印度大陸に及ばんとしてゐる。しかし、邦人の知識の最も少ないのは、恐らく中央亞細亞から西亞細亞の方面であらう。今日でもその邊りを親しく視察調査した人は極めて少ない。況んやその昔に於てをやである。思へば明治二十九年、福島大佐（後の安正大將）が中央亞細亞よりペルシヤを視察されたのが、この方面調査の第一步であつたが、その後六年私がその後を繼いだのである。明治三十五年夏、私は墺國參謀士官ホフリヒター君と共に南露を横斷し、コーカサス山を越へ、裏海を渡り、露領トルキスタンを極め、プハラ驛にてホフリヒター中尉の歸國を送り、それから單身アフガニスタンの境より再び裏海に浮び、一萬九千尺のデマバンド峯を乘り越へ、首都テヘランに入り、それからアチエル

バイジヤンの高原を駛過し、アララツト山を廻つて再びコーカサスに出で、黑海を渡り、ロシヤを縱斷してドイツのベルリンへ辿り着いたのである。最近、福島將軍の大陸橫斷記が再版されたが、私が當年ものした中央亞細亞旅行記も問題となつて、これ亦再版に附することゝなつた。

四十一年の昔、世界の問題は東は滿洲をめぐつて日本とロシヤが抗爭せんとし、西はバルカンを中心としてトルコとロシヤが決戰せんとしてゐた。二問題はいづれもロシヤが一方の對手である。當時ロシヤは世界に冠たる大陸軍國であつたが、兩面作戰は困難といふ他はない。そこで、東亞細亞を一應視察し終つた私は、先輩の勸めもあり、自己の主張もあり、バルカン問題を中心としての中、西亞細亞を檢討することが、當面の任務であると思つたので、東亞同文會から特に西部亞細亞特派員なる肩書を得てゐたので、三十四年にバルカンを視察した私は、翌三十五年に中央亞細亞を見たのであつた。而して世局は今や一轉した。西に於ては獨伊樞軸軍が南ソより南コーカサスに迫らんとし、又一面北阿よりエジプトを席捲して西亞に進まんとしてゐる。勿論、米英はこれを重大視し、第二戰線をこの方面に築かんとする情勢も見へる。從つてこの中西亞細亞が世界の耳目を欹てしむるのであつて、わが國でも近來この方面へ注目する人が多くなつて來た。そこで私は舊稿に加筆して、日露戰前に於ける中央亞細亞の情勢と現在の情勢を比較研究すると共に、トルコ及びバルカンに對する英露の過去に於ける抗爭、樞軸軍現在に於ける挾擊の委勢等について所感を披瀝し、これに『亞細亞中原の風雲を望んで』と題して公にすることとしたのである。この稿、入莊忽々筆を執つたが、僅かに三日にしてこれを了したのである。

詩の意味は、私は今や炎涼圏外の絕對境に居る。利も要らず、名も要らず、生命も要らぬ境に從容としてゐるが、窓外には鶯が囀るにつかれ、松は森々として繁つていかにも幽邃の境である。此の幽邃裡に中亞の風雲を揣摩したのであるが、扨て自分は多年南方建圏に精進して來た。それで天南何處の地に孤筇を卓せんといふのである。

五、翠微に滿つ　同日

夏淺高原都客稀　晚風曉露冷侵衣
再來數日如相約　黃鳥驚歌滿翠微

夏は淺く高原都客稀れに、晚風曉露冷衣を侵す。
再來數日相約するが如く、黃鳥驚歌翠微に滿つ。

前にも述べた通り、夏がまだ淺くて都會の人々も少なく、夕方の風も朝の露も冷々として衣を侵すのである。一兩日の用務を東京に辨じ、山莊にもどつて來てみると、鶯の歌が相變らず翠微に滿ちてゐるといふのである。

これに對して某詩宗は『一味の清楚、管に信せて揮灑し、咳唾珠を成す、顆餘韻有り、梧君の近業世界を見渡しつゝ、

一進轉を見る、風骨逾高く一頭地を抜く』と評されたが、過褒兼て當らないのである。

月日のたつのは早いもので、私がこの山莊を築いてからもう八年になる。檜を繞るの綠は鮮妍である。新築當時は構内の落葉松の如き白蟻の爲めに枯死するもの少なくなく、年々の手入れに努力し、白樺、樅その他の樹木をも植ゑて今日に至つたのである。樹木が育つてみると、鶯等も度々訪れて來て、美しい聲が朝夕の書齋に流れ込んで來る。いかにも神韻縹緲として、私もいつしか仙人になつたやうな氣がする。そこで

六、骨仙ならんとす　七月九日

築二墅信山一經二八年一　繞レ檜竹樹綠鮮妍
鶯聲況又流二芸室一　縹緲神飛骨欲レ仙

墅を信山に築き八年を經たり、檜を繞るの竹樹綠鮮妍。
鶯聲況んや又芸室に流れ、縹緲神は飛んで骨仙ならんとす。

實況である。

絕對の境に安住してゐても、志は胸に在つて依然盛んなものがある。殊に南方建國は私の素志である。そこで、人間に墮ちて六十年、贏つも輸るも、得るも失ふも、雲煙視してゐるのだが、未了圖南の志を抱きもつて、暫らく白雲來去の邊に住むのだと歌つてみた。

七、偶拈　七月十一日

墮在人間六十年　輸贏得失視如煙
抱二將未了圖南志一　閒住白雲來去邊

人間に墮在して六十年、輸贏得失視て煙の如し。
未了圖南の志を抱き將つて、閒に住む白雲來去の邊に。

淺間山はこれを望めば秀麗そのもので、玉の膚、雪の貌、謂はゞ美人の如く、動物にすれば象のやうな氣がする。しかし、あの溫和な象が時にもの凄い怒りを發して、巨木を踏み倒す如く、淺間も爆發すれば噴煙天に沖するものがある。特に本年は三日にあげず轟々たる爆音と共に灰を降らすが、何の不平があるのであらう。そこで、二首を得た。

八、淺間山沙雨を降らす　その一　七月十二日

一朶雄峯聳二九晏一　玉膚雪貌與レ吾親
胸中誰識不平在　餘燼爲レ沙迸二四隣一

一朶の雄峯九晏に聳へ、玉膚雪貌吾と親しむ。
胸中誰か識らん不平在り、餘燼沙と爲りて四隣に迸る。

九、同上　その二　同日

世界を見渡しつゝ、

積翠濃邊是我家　幽庭茲幸世囂遮
不レ圖仙境驚レ心在　噴餘淺峯空散レ沙

積翠の濃なる邊是れ我が家、幽庭茲に幸す世囂の遮るを。
圖らず仙境心を驚かす在り、噴餘淺峯空に沙を散ず。

淺間を見て常に思ふところであるが、眞の勇士は常に謙虛である。諸葛孔明は出師の表で『先帝臣の謹愼なるを知り、臣に任ぬるに大事を以てす』といつてゐるが、謹愼の二字こそ處世の秘訣である。淺間は普段いかにも謙虛であるが、時々何の不平があるか、噴煙天を冲し沙雨を降らすのである。

十、鬚髯を剃らず　七月十二日

剃刀の刄がこぼれたので、暫らく鬚髯を剃らなかつた。頭髮はまだ黑いが、顎鬚は相當白くてなかなか眼立つのである。そこで、戲れに一首詠んでみた。

落落骨頭依レ舊剛　迢迢世路到レ今長
蓬頭亂髮君休レ笑　欲レ算吟髭幾寸霜

落落たる骨頭舊に依つて剛に、迢迢たる世路今に到つて長し。
蓬頭亂髮君笑ふを休めよ、算へんと欲す吟髭幾寸の霜。

本當にその通りで、顎鬚が伸びて來ると小半は白莖となつてゐるのを發見する。

又、靜かに世の中を見てゐると、時局に便乘するの徒、權力に盲從するの輩が圖々しく我物顏に羽搏いてゐるやうである。しかし、これが人間の世界といふものであらう。そこで燕雀が時に及んで鵬搏するが、何も龍鍾卽ち世の中が思ふやうに行かぬといつて劍を撫して歎ずるには及ばぬ。そんなものはどうでもよろしい。天は何もかも知つてゐて、萬物を育々生々してくれるのである。路傍の名も無き草や木でも、皆それ〴〵天意によつて生きてゐるのであるから、心してそれを看よう。そこに眞理があるのである。本體があるのである。そこで次の如く吟じた。

十一、心を以つて看る　七月十三日

及レ時燕雀尙鵬搏　不レ用龍鍾撫レ劍歎
育育生生天意在　一芒一木以レ心看

時に及んで燕雀尙ほ鵬搏す、用ひず龍鍾劍を撫して歎ずるを。
育々生々天意在り、一芒一木心を以つて看る。

これと同じやうな氣持で歌つたのが、次の『惟一眞』の句である。

十二、惟一眞　七月十四日

花落花開秋又春　事成事敗舊還新
回レ頭六十餘年跡　終始不レ渝惟一眞

世界を見渡しつゝ、

〜花落ち花開く秋又春、事成り事敗る舊還た新。
頭を回らせば六十餘年の跡、終始渝らず惟だ一眞。

讀んで字の如く、花落ちて秋となり、花開いて春となる。事の成るあり、敗るゝあり、舊は新となり、新は又いつの間にか舊となる。自然も人間も同じことを繰り返してゐるのであるが、私も六十餘年の跡を回顧すれば、山あり河あり、しかしその中にあつて惟一つ渝らないものは眞である。私は人生の秋も最中となつて漸くこゝへ辿りついたわけである。

某詞宗はこれに對して『國士の情懷二十八字に之を盡す』と評された。

この日は又『無レ始莫レ終の人』といふ詩も生れた。

十三、無始莫終の人　同日

欲レ求二一眞一六句春　多謝心懷日日新
朝暮鶯聲洗二吾耳一　應レ爲二無レ始莫レ終人一

一眞を求めんとして六句の春、多謝す心懷日々に新なるを。
朝暮鶯聲吾が耳を洗ふ、應に爲るべし無レ始莫レ終の人。

申す迄もなく私は一眞を求めて六十餘年を過して來たが、何の幸か心懷は日々新なるものがあつて感謝に堪へない。山莊の朝暮は鶯が美しい聲で私の耳を洗つてくれるが、その清淨幽遠な生活に入つて、私は始め無く終り莫きの人になりたいものである。なるべしである。

山莊の夏が少しづゝ深くなつて行くにつれて、山百合の蕾も少しづゝ太くなつて行つたが、フト見ると最も莖の大きいものが蟲に喰はれてゐるではないか。よつて直ちに驅蟲劑を求め、朝夕驅蟲に努めた結果漸く他の莖をとりとめることが出來た。そこで又一詩が出來たのである。

十四、驅　蟲

數種草花閒自栽　幽姿清楚伴二壺杯一
奈何蝨蝕侵二芳蘂一　奇劑驅レ蟲絶二宿災一

數種の草花閒に自ら栽へ、幽姿清楚壺杯に伴ふ。
奈何んぞ蝨蝕芳蘂を侵し、奇劑驅蟲宿災を絶つ。

極めて難澁な句であるが、實況を眞寫したものである。卽ち私は數種の草花を山莊の庭に栽へて、その幽姿清楚な有樣を愛でながら麥酒の杯を傾けて喜んでゐるが、突然蟲が芳蘂を侵して今にも莖を折らんとしてゐるので、驅蟲劑を用ひて彼等を絶滅したといふのである。

こゝに面白いことは、一本の莖は遂に蟲の爲めに折れたのであるが、數個の蕾がついてゐていかにも捨て難いので、室內に齋らし花瓶に挿したところ、水分を十二分に吸上げたのであらうか、庭に殘つたものより却つて大きく立派に咲いたのである。自然の儘の花は元より美しいが、かうなると生花

も惡くはない。物は隨處に生き、詩となれば、畫ともなるのであらう。人間も同じことで我執のある間はつまらぬことにひつかゝるが、無始莫終の境地に入れば到る處に青山がある。『身心脱落、脱落身心』と道元禪師は喝破してゐるが、これは全く體驗からの語である。生花もよし、野の花もよしと私は言ひたいのである。

山莊の朝は賑かである。色々の鳥が夜明けから喧々と囀り出す。窓を開くと靉々たる松風が入つて來る。私は顏を洗つて大氣を思ふ存分呼吸すると、胸中の塵りは跡方もなく實に清澄な氣分に滿ちる。これが方寸虛といふものであらうか。

十五、方　寸　虛

群鳥喧喧報レ曉　初　松風靉靉滿二蝸廬一
蹶レ衾漱レ口　披レ扉去　大氣吐呑方寸虛

群馬喧々として曉を報ずるの初、松風は靉々として蝸廬に滿つ。
衾を蹶つて口を漱ぎ扉を披いて去り、大氣を吐呑すれば方寸虛なり。

七月は私の實父母のなくなつた月である。實父を失つてから二十二年、實母を失つてから十七年、本年の三月には久し振りで鄉里に歸つて、その墓に展したのであつたが、七月も半となつて亡き父母を憶ふの情切なるものがある。

十六、亡實父廿二周忌　七月十六日

吾考捐レ兒廿二年　萍踪猶未レ賦二歸田一
誰知今夜孤燈底　夢裏無レ端謁二墓前一

吾考兒を捐てゝ二十二年、萍踪猶ほ未だ歸田を賦せず。
誰か知る今夜孤燈の底、夢裏端し無く墓前に謁す。

父が死んでから既に二十二年になるが、私は江湖に漂浪してまだ鄉里に歸ることが出來ない。山莊に夏を過してゐると、孤燈の下、夢の中にはしなくも墓に參つたのであつた。

十七、亡實母十七周忌　同日

哭レ妣干レ今十七年　慈顏如レ在眼中鮮
三遷庭訓猶難レ報　風樹感深獨愴然

妣を哭して今に十七年、慈顏在すか如く眼中に鮮かなり。
三遷の庭訓猶ほ報ひ難く、風樹の感は深くして獨り愴然たり。

母が亡くなつてから十七年になるが、母の慈顏は今でも存命して居らるゝ如く鮮かである。孟子の母が三遷の庭訓をたてられた話は有名だが、わが母の庭訓も耳に殘りながらまだ報いることが出來ない。不孝な自分の姿を顧みれば、所謂樹靜まらんとすれど風止まず、子孝ならんとすれど親在まさず

の歎きを深くするのである。

これに對して先輩詞宗は評して曰く。『一氣筆にまかせて、符采突然、烟霞の痼癖、猶ほ其の半を占む。底事ぞ末尾、孝情油然、英雄首を回らせば孝子と爲る。』と。又他の某詞宗は『二首孝思楮に滿つ、音節鏗然たり。』と評されたが、思ふに私の眞情を汲んで下さつたのであらう。

十月十七日となつて、例年の如く淺間登山を試みたが、鬼押出しの巖頭に立つて二首を得たのである。

十八、鬼押出巖頭　其の一　其の一　七月十七日

年年歲歲物相同　歲歲年年人不レ同
隨處隨參無我境　斯身無始又無終

年年歲歲物相同じ、歲歲年年人同じからず。
隨處に隨參す無我の境、斯の身は無始にして又無終。

巖頭に立つてみると、いつ來ても山は同じであるが、人は同じではない。去る者は去り、來る者は來るのが人生である。しかし、かうして隨處に無我の境に入つてみると、自分も亦山と同じく始め無く終り無いものであることがわかり、永久に生きてゐるといふ感を強くするのである。

十九、同　上　其の二

閑餘又上翠微間　仰對二崔嵬一俯黛鬟、
忽見噴煙衝レ頂起　降沙如レ雨落斑斑

閑餘又上る翠微の間、仰いて崔嵬に對し俯して黛鬟に。
忽ち見る噴煙の頂を衝いて起るを、降沙雨の如く落つて斑斑たり。

丁度山に登つてみると、靜かな淺間が突然爆發を初め、黑煙の天を衝いてゐるのを望んだ。しかも沙を降らすこと雨の如く、地上は時ならぬ雪か花か、斑々たるものがある。

實況である。

私は山莊へ杜詩一卷を携へて入つたが、閑窓に倚つてこれを讀んで見ると、いかにも切々の情が現はれてゐる。彼は亂世に生れたが隨處に隨感して、金玉の文字を吐き、千古の詩篇を殘してゐるのであるが、私は何の幸か日東の帝國に生を享け、上に聖天子を戴き、今や八紘爲宇の大精神を世界にひろげつゝある時に際會して、胸中何等の不平不滿もない。一身が淸淨であることの幸福。私はその眞情を吐露して五律二首をものにした。

二十、山莊閒居　其の一　其の一　同日

山莊常曉起　却識隱栖忙
乘レ興過二微徑一　凝レ心按二大綱一

世界を見渡しつゝ、

行藏須レ有レ度　靖綏豈無レ方
出レ浴凭レ欄坐　殘蟬澹二夕陽一。

山莊常に曉起、却つて識る隱栖の忙しきを。
興に乘つて徹徑を過ぎ、心を凝めて大綱を按んず。
行藏須らく度有るべし、靖綏豈に方無からんや。
浴を出で欄に凭つて坐せば、殘蟬夕陽澹し。

曉に鶯を初め諸々の鳥が鳴くので、山莊の朝はいつも早起きになるが、然も隱栖してゐると却つて忙しいことを識るのである。興に乘れば出でゝ徑を歩くこともあるし、入つて南方對策如何を練ることもあるが、進んで取ることも、退いて守ることも自ら度があるのである。徒らに行動はしない。靖綏豈に方無からんやである。即ち大詔に仰せられたる如く、民をして皆その所を得せしむるのである。親心をもつて十億の生民に接するのである。偶〻風呂から上つて欄によると、蟬が鳴き出して夕陽が澹いといふ實況を以つて句を結んだのであつた。

二十一、同　上　其の二　同日

山中多早寢　堆積讀殘書
窓下松風動　枕頭月影虛
神澄青燭影　境適白雲居
夢後起推レ戸　向レ空一吸噓

山中多くは早寢、堆積す讀殘の書。
窓下松風動き、枕頭月影虛し。
神は澄む青燭の影、境は適す白雲の居。
夢後起つて戸を推し、空に向つて一吸噓。

前の詩は曉起を起句としたが、これは早寢を起句として、夜の閑居を歌つてみた。讀み殘しの本が澤山あるわが部屋で、私は早く床につくが、松風がソヨ〳〵と吹いて、枕下には月影さへ射し込んで來るではないか。さういふ時、心は全く清淨で、白雲の居はわが住むにふさわしいのである。ウトウトしてから眼が覺めると、わけもなく立ち上つて一寸、戸を推して見る。そうして靜寂な夜空に向つて、一吸噓する時、私は天上天下唯我獨尊の氣になるのである。

これに對し某詞宗は『趣高く氣は旺んに、起臥皆詩である。宛として禪衲に似て居る。方に三昧に入つた。』と評された。又他の先輩は『却つて識る隱栖の忙しきをといふ。這般の情趣は豈に俗子の能く解する所ならんや。勝を探つて又讀書す。文を修めて又政に資す。自ら是れ梧堂君の本色。』といはれた。評はともあれ、私としては實感を直寫したまでゝある。

箱根仙石原に夏を過して居らるる岩崎清七翁は、今年七十九歳でやがて八十翁となるが元氣溌剌としたもので、面白い詩を寄越された。即ち

齡垂二八旬一生氣新　猶登二青閣一接二紅脣一
最忻當日老春畝　醉枕不レ忘擁二美人一

といふのである。そこでこれに次してみた。

二十二、岩崎老寄する所の玉韻に次す　七月十九日

青空打レ玉氣逾新　綠酒三杯挑二絳脣一
春畝退齡纔六九　不レ如岩老杖朝人

青空玉を打つて氣逾新に、綠酒三杯絳脣に挑む。
春畝の退齡纔かに六九、如かず岩老杖朝の人たるに。

翁は八十に垂んとして青樓に登つて美人に接する氣力があり、最も忻ぶことは伊藤公が醉ふて後、美人を擁することを忘れないことだと歌はれたので、私は大いに笑つたのであるが、元氣な翁は又ゴルフ・フアンで私の好敵手である。私は近年多忙の爲めゴルフも止めてしまつたが、それを續けて居られる翁は私より遙かに上達されたであらう。そこで仙石原でゴルフに興ずる翁を思ひ出して起句としてみた。そして歸つては三杯の綠酒に醉ふて、美人に挑む勇氣もあると翁の姿を描いた。伊藤公は元氣であられたが六十九歳で亡くなられたので、翁の八十歳に近づいて居られるには遙に及ばないと賞めたのである。翁は全く元氣な方だ。

七月も下旬になると輕井澤ではもう秋である。讀書に倦むとその邊を歩いて吟神を養ふのであるが、俄雨が一過すれば鶯の聲も亂れ、涼しい風が衣襟に滿ちて實にすが〳〵しい。

二十三、衣襟に滿つ　七月二十四日

山樓秋動綠成レ陰　倦レ讀徜徉獨步吟
驟雨一過鶯杼亂　涼風萬斛滿二衣襟一

山樓秋は動いて綠陰を成し、讀むに倦んで徜徉し獨歩して吟ず。
驟雨一過して鶯杼亂れ、涼風萬斛衣襟に滿つ。

全く實況である。

又、秋に入らんとしての景色は、左のやうな氣持を起さしめるのである。

二十四、靜中に聽く　七月二十五日

松風颯颯送二清泠一　夕鳥喈喈遶二戶扃一
浴罷三杯神更爽　分明天籟靜中聽

松風颯颯として清泠を送り、夕鳥は喈喈として戶扃を遶る。
浴罷三杯神更爽　分明天籟靜中聽

世界を見渡しつゝ

浴罷んで三杯神更に爽かに、分明に天籟を靜中に聽く。

こんな生活をしてゐると思は色々の方面に走るのである。兩親のことも想ひ出すが、又私の後を繼ぐべき長男が北歐スエーデンのストックホルムに在ることをも思ひ出すのである。七月初に『元氣で居る』といふ電報を寄越して以來、消息に接しないが、今はストックホルムは晝の最も長い時季で、太陽の入るのは十一時半頃、そして一時半頃には夜が明けかゝる筈である。スエーデンはその山、その水の美しさ共に世界に並びなきのみならず、その人も亦文化社會方面に優れ、確かに世界一流の文化國といへる。こゝには中央亞細亞及び西藏の大探險家として有名なるスベン・ヘヂン博士が七十六歳で猶ほ元氣で居られる。昭和十二年に私共夫妻がその地を訪ふた時、久し振りに會合したことを思ひ出すが、長男にも紹介をしたところ元氣で居られるとのことであつた。彼の情報によると、ストックホルムは住みよい處で、ベルリン在住の時とは別天地の感がするさうだ、しかし、同地は今各國のニュースの集るところで、彼にとつてはその青春を錬磨する活舞臺といはねばならぬ。そこで一絕を送つて彼の奮起をうながしたのであつた。

二十五、長男の遙か北歐瑞都に在るに寄せて示す　七月二十五日

兒在二殊方白夜邦一　山光水色美無レ雙
青春一刻須二磨勵一　期レ爾他年鼎是扛

兒は殊方白夜の邦に在り、山光水色美雙無し。
青春一刻須く磨勵すべし、爾に期す他年鼎を是れ扛ぐるを。

これに對し先輩詩宗は『沈摯悃到、言情款款、精神淵著、掇皮皆眞』と評され、又他の先輩は『二十八字、勸誡具備、憂然其聲』と言はれた。

永見七郎君の著した『興亞一路井上雅二』を讀んだ。菊判千二百頁の大册で、これを了するに二日かゝつた。

二十六、『興亞一路井上雅二』を讀む　七月二十七日

杖鄕加レ六素心存　俯仰依然宿昔魂
興亞傳成多二感慨一　讀從二昧旦一到二黃昏一

杖鄕六を加へ素心存す、俯仰依然宿昔の魂。
興亞傳成つて感慨多く、讀んで昧旦より黃昏に到る。

又、岩崎翁から詩が來たので、これに次してみる。

二十七、又岩老の玉韻に次す　七月二十九日

乾坤何國抗二天兵一　新附簞壺皆鐵城
至竟武威存二綏撫一　砲聲回レ首是歡聲

世界を見渡しつゝ、

乾坤何れの國か天兵に抗せんや、新附の簞壺皆な鐵城。
至竟武威は綏撫に存し、砲聲首を回らせば是れ歡聲。

世界何れの國かわが天兵に抗するものぞ、新に附いた生民は總て喜んでわが鐵城となつてゐる。思ふにわが武威を現はすは決して獨り自らを強くする爲めのみでなく、その志は大愛を以て億兆を綏撫するにあるのである。故に砲聲が止んだら直ぐその後に歡聲が上るのである。

これに對して先輩詞宗の評がある。『古語に云ふ、時勢を知る者は俊傑なりと。作者は眞に俊傑である。此詩宜しく戰後の經營警策に用ふべし。』過褒敢て當らない。

又同じやうな句であるが、亞細亞を興すといふのは、五十年一貫のわが志であつて、曾て移らずして今日に至つた。この心は唯だ天がよく知つてゐる。この夕、山莊で香を焚いて居ると、いかにも爽涼な氣が肌を侵し、フト見ると月が帷を透して照つてゐる。同じく『興亞一路井上雅二』を讀んだ後の氣持である。

二十八、月帷を透す　七月二十八日

興亞宿心曾不レ移　居然俯仰有二天知一
山莊此夕焚レ香坐　爽氣侵レ肌月透レ帷

興亞の宿心曾つて移らず、居然俯仰天の知る有り。

山莊此の夕香を焚いて坐せば、爽氣肌を侵し月帷を透す。

話は又山百合にもどるが、七月も末となつて待望の花は今や滿開である。何等の塵を留めず、醇白の一心はいかにも涼しいといふ意味を歌つて次のの句を得た。

二十九、又、山百合の花　七月二十九日

山百今花高放レ香　鶯啼松韻小仙鄉
不レ關世上多二塵垢一　醇白一心披レ辯涼

山百合の花高く香を放つ、鶯啼松韻小仙鄉。
關せず世上塵垢多きに、醇白の一心辯を披いて涼し。

これに對して又先輩詞宗は評されて曰く『淋漓飛動、曲折自如、或は平に或は險に、愈淺く愈深し。情眞に筆達し、爽朗を一串す』と。敢て當らないのである。

これは滿開の姿であるが、用心をせねばならぬ。夜半に妬みの嵐が吹かぬとも限らぬ。風吹けば花は落ちるのである。

三十、秋花を戒む　同日

秋蹊歲歲任二花開一　風裏餘馨入レ座來
扃レ戸慇懃猶憶レ汝　怕レ遭夜半妬風猜

世界を見渡しつゝ

秋蹊歳歳花開くに任じ、風裏餘馨座に入つて來る。
戸を扃ぢ慇懃に猶ほ汝を憶ふ、遺ふを怕る夜半妬風の猜むを。

これは人生も同じことで滿つれば缺くるのであつて、奢る者は久しくないのである。故に達人たる者は宜しく名利に超越せねばならぬ。

海外植民學校創立以來、永く苦心して人材を養成し來つた主事の今井修一君が、未だ五十余歳の若さで卒然として逝かれた。昨年の秋にはその長男が陸軍士官として戰線に名譽の戰死を遂げ、その傷み未だ消へざるに君は未亡人と十八歳の次男を殘して逝かれたのである。私は初代校長の崎山君がブラジルに移住された後を受け、顧問から校長となつたがそれは名ばかりで、一切は今井君の活動に待つて來た。今その今井君を失つて悲痛の感に堪へないのである。しかし、人生命あり、地上の生命が必ずしも全部ではない。精神的事業を爲した者には永生の道が開けてゐる。今井君の殘された教は永く盡きることなく南米、南洋、滿蒙の各方面に生きてゐる。それを思へば君以つて瞑すべしである。そこで左の一首を未亡人に贈つて靈前に供へていたゞいたのであつた。

三十一、今井修一君を悼む　七月三十日

開レ學育レ才三十年　一朝何事出二塵緣一
唯欣遺韻長無レ盡　到處天涯衣鉢傳

學を開き才を育くむ三十年、一朝何事ぞ塵緣を出づ。
唯だ欣ぶ遺韻長く盡きる無く、到る處の天涯衣鉢を傳ふ。

山中の雷は凄い雨を呼んで、いかにも天地晦冥といふ狀態になるが、風雨が過ぎて終ふと、天拭ふが如くこれは亦何といふ凉しさであらう。清かさであらう。一陣の凉風が榻を吹いて來るのも山中の一德である。そこで次の詩が出來た。

三十二、大　雷　雨　七月三十日

閃閃驚霆殷殷雷　乾坤冥晦氣凄哉
雨過雲霽天如レ洗　一陣凉風吹レ榻來

閃閃たる驚霆殷殷たる雷、乾坤冥晦氣凄哉。
雨過ぎ雲霽れて天洗ふが如く、一陣の凉風榻を吹いて來る。

東京へ一寸戻つて用務を辨じ、紅塵から逃れて復山莊へ歸つてみると、靜かなること禪堂の如きものがある。

三十三、歸　莊　雨　後　八月七日

埋二沒紅塵一了二世緣一　復歸二山墅一靜如レ禪
天晴鶯語心情適　日射二蒼林一倍鮮

世界を見渡しつゝ

紅塵に埋没して世緣を了し、復た山野に歸れば靜かなること禪の如し。
天は晴れ鶯語心情に適し、日は蒼林を射て一倍鮮かなり。

八月八日岩崎翁から又詩を贈られた。曰く

向レ吾 休レ問 遠二塵 寰一　欲下訪二古 仙一語中碧 山上
今日 天公 更 秩序　熱風 襲 到 玉門 關

と。そこで次したのが左の句である。

三十四、又、又、岩老玉韻に次す

心胸 落落 出二塵 寰一　魂夢 悠 悠 住二碧 山一
已 入二無 生 無 死 境一　乾 坤 豈 有二阻レ吾 關一

心胸落落塵寰を出で、魂夢悠悠碧山に住む。
已に無生無死の境に入れば、乾坤豈に吾を阻むの關あらんや。

翁は『吾に向つて問ふを休めよ塵寰に遠ざかるを、古仙を訪ふて碧山を語らんと欲す。』と言はれたが、私は由來心境は落々として塵寰を出てゐる。訪はんとするのではない。悠々として碧山に住んでゐるのだともぢつてみた。已に生無く死無きの境に入つてみると、此の世界の何處にわが行く先を拒む關所があるであらうか、何もないといふのである。

これで銷夏絕句三十四首を終つた。八月八日は立秋である。そこで次に移ることゝしたい。

(三) 昭和十七年の初秋　(初秋閒居)　十九首

立秋の後一日、卽ち八月九日妙高山麓の赤倉を訪ふことゝした。この行、一は以て溫泉に浴し、一は以て岡倉天心を弔はんとしたもので、夫妻の他に女子大學教授連六名の一行で、早朝山莊を出で田口驛に下車、微雨を冒して高原ホテルの人となつたのは晝過ぎであつた。妙高は志賀高原より眺めても、白馬山より眺めても、いかにも妙高らしい感じのする山である。しかし、此の日は殘念ながら雨も降り、霧も深いので咫尺を辨ぜず、午後は靈泉に浴して讀書に時を過すの他はなかつた。

一、妙高に攀ぢて高原客棧に泊る

味旦發二村墅一　夫妻上二碧山一
霧深途欲レ失　雨急鳥將レ還
出レ浴無二塵垢一　勸レ茶有二翠鬟一
飄然機外客　占斷白雲寰

味旦村墅を發し、夫妻碧山に上る。
霧深くして途失はんとし、雨急に鳥將に還らんとす。
浴より出ずれば塵垢無く、茶を勸めて翠鬟有り。
飄然たる機外の客、占斷す白雲の寰。

全くその通りで加ふる處がない。唯だ先輩詩宗がこれを評して『峯頭に卓立す、仇儷仙の如し、言言眞樸、山靈妬み難し』と言はれた。私共夫妻のことを頭に置いて、『山靈妬み難し』と言はれたのは面白い。

夜に入つて四邊の清淨なことが一層身にしみて來る。漠々たる谷川の雲が暗く立籠めてはゐるが、松風の韻、清泉の音いづれも氣持がよい。山樓獨り眠り難いので又一句が口をついて出た。

二、未だ眠らざるの人　同日

沈沈夜色不レ揚レ塵　漠漠溪雲暗二四隣一
松籟泉聲俱適レ意　山樓獨有二未レ眠人一

沈沈たる夜色塵を揚げず、漠漠たる溪雲四隣暗し。
松籟泉聲俱意に適し、山樓獨り未だ眠らざるの人有り。

全くこれも實感である。

翌朝細雨を冒し、赤倉山莊に岡倉天心を弔つた。天心は夙に外國にも知られた東洋哲學者で、『亞細亞は一なり』と稱へたことは有名であるが、美術家としても亦明治藝術界の先驅である。最近その知人、門下生が天心を慕つて顯彰會を起し、彼の終焉の地たる赤倉山莊を改築し、その規模を擴大して

故人を偲ばしめることゝしたので、傍に招魂碑も建てゝある。新に成つた簡素な山莊は、周圍に溝を廻らし、これに天然の水を流してゐる。さゝやかな清流は天心の遺業を讃える如く、檐を繞り滾々と流れて下手にある碧の池に注ぐのである。卽ち一絕を得た。

三、赤倉山莊岡倉天心を憶ふ　八月十日

白水環レ檐洗レ耳奇　招魂碑畔草蟲悲
無レ端來弔前賢址　正是山莊微雨時

白水檐を環つて耳を洗つて奇なり、招魂碑畔草蟲悲しむ。
端無く來り弔ふ前賢の址、正に是れ山莊微雨の時。

起句に『白水檐を環つて』とあるは實況で、耳を洗つて誰でも俗を脫するのである。早や秋の初のことゝて、招魂碑の畔では蟲の聲が悲しく故人を弔ふやうである。私は微雨がシト〳〵と降り注ぐ時に訪れたので、特に故人を憶ふの情が深かつた。

これに對して某詩宗は『結尾の三字、天心の意を得たり、若し世に在らしめば一誦嗟歎すべし』と言はれたが、過褒敢て當らない。

その日の正午歸途に就いたが、遂に妙高を見ることが出來なかつたので、又一首を得た。

四、妙高を見ず　同日

絡緯聲微宿雨餘　金風早已入二郊墟一
天公底事捲雲霧、四沒孱顏存一廬

絡緯聲は微なり宿雨の餘、金風早やく已に郊墟に入る。
天公底事ぞ雲霧を捲き、孱顏を四沒して一廬存す。

絡緯とはこほろぎのことである。雨の後でこほろぎの聲が微かで、颯々と吹く秋風はこの高原一帶を掠めてゐる。私は妙高の靈姿に接せんとしたが、天は雲霧を捲いて全然孱顏を見ることが出來ず、唯だホテルの一廬を存するのみであるといふのである。

これに對して某先輩は『寓意有るが如く含蘊無限。結尾二句意味深長』と言はれたが、私としてはたゞ實感を直寫したゞけのことである。しかし、他人は左樣に思はれるかも知れない。

秋も漸く深くなると、山莊の自然も亦靜かに變化して行く。山百合の花も散つて終つた。そこで『花蕊墜つ』の詩が出來た。

五、花蕊墜つ　八月十三日

大道坦然宜二直趨一　森羅萬象總歸無
開花落蕊隨二時序一　底事人間守二舊株一

大道は坦然たり宜しく直趨すべし、森羅萬象總て無に歸す。
世界を見渡しつゝ

開花落蕋時序に隨ふに。底事ぞ人間舊株を守る。

大道は坦々としてゐる、宜しく直趨すべしである。これが人間の道である。森羅萬象何事も總ては無に歸するのであつて、開く花も落ちる蕋も亦時序に從ふのである。春去り秋來り若きは榮へ老いたるは亡ぶのである。然るに何事ぞ、人間のみは舊株を守つて汲々としてゐるのであらうかと、他の悟り得ないのを憐れんだのである。

岩崎翁から又一詩が來た。曰く

閑居竟日友二雲煙一　乘レ興吟書身欲レ仙
劣作自嗤出愈拙　千篇一束半文錢

と。早速これに次して『値萬錢』の詩を得た。

六、値　萬　錢　八月十四日

榮辱得喪看似レ煙　山莊高臥學二詩仙一
蟬聲漸遠蛩聲近　麥酒三杯値萬錢

榮辱得喪看て煙に似たり、山莊高臥して詩仙を學ぶ。
蟬聲漸く遠く蛩聲近し、麥酒三杯値萬錢。

榮辱得喪は煙のやうなもので、世間的なことは一切問題にならない。私は山莊にゐて詩仙を學んでゐるが、早や秋に入つて蟬の聲も遠ざかり、代つて色々の蟲の聲が近くなつて來た。この時、浴後三杯のビールを傾けると、何ともいへぬ氣持で萬金の値があるといふのである。

既に山莊に閑臥すること三旬、秋氣動いて萩の花、蘆の穗が夕陽に映つる樣は何ともいへない情景である。眼前の山々は少し煙つてゐるが、浴後窓に倚る私の神は爽快で俗機を絶つてゐるといふのが次の句である。

七、斜暉に映ず　同日

眼前林翠帶レ烟微　出レ浴傾レ杯無二俗機一
閑臥三旬秋始動　芽花蘆穗映二斜暉一

眼前の林翠烟を帶び微に、浴を出で一杯を傾け俗機無し。
閑臥三旬秋始めて動き、芽花蘆穗斜暉に映ず。

これに對し某詩宗は『詩中畫有り、神韻翛然、盡きざるの意を含み言外に見る』と評されたのもおかしい。

連日の電報に中西亞細亞の風雲が次第に窮迫しつゝあることがわかる。獨逸軍のスターリングラード進擊は申す迄もなく、その一部隊はコーカサスのエルブルス高峰を登つたといふ噂があるが、これに對し米英はイラック、パレスチナ及びイランから獨逸、伊太利軍の南下を阻止し、所謂第二戰線を

この方面に布かんとするが如き形勢もほの見へるのである。私は『亞細亞中原の風雲を望んで』といふ一書を公にせんとしてゐるのであるが、今日はそゞろに曾遊を思ふの情に堪へない。

八、中亞風雲を望んで　坐ろに曾遊を憶ふ

思馳中亞萬重雲　眦裂神州虎翼軍
四十年前來往跡　丹心一片豈論勳

思は馳す中亞萬重の雲、眦は裂く神州虎翼の軍。
四十年前來往の跡、丹心一片豈に勳を論ぜんや。

思を中亞萬重の雲に馳せると、神州虎翼の軍が眦を決して遠く印度に迫らんとしてゐる。四十年前來往の跡を顧みると感慨無量であるが、然もわが心は丹心報國あるのみで、勳を求めるのではない。これに對して某先輩は『幕王志士の什に似たり』と言はれたが、我々は維新回天の事業に年少時代の志氣を鼓舞されたので、彼等に負ふところが少くないことを自分も思はざるを得ないのである。

又一日夫妻相伴つて數名の女子大教授と共に淺間に登つた。此の日も運惡く雨降り、霧深く徒歩に苦しんだが、淺間の頂きに上ると近くの峯は霞み、遠くの峯は虹となり、然も足元に雲が飛び、又雨が過ぎるのである。然るに暫らくにして遠くの方から風が雨を吹き上げて、瀧のやうになつて來たので、止むなく傘をかぶつて巖陰に隱くれたのであつた。

九、淺間登山　來の一　八月十七日

近峯霧釆遠峯虹　驟雨飛雲脚底風
脚踏淺山最高頂　忽爲天半一蓑翁

近峯は霞釆遠峯は虹、驟雨飛雲脚底の風。
脚は踏む淺山最高の頂、忽ち爲る天半の一蓑翁と。

間もなくその雨が過ぎると、天は拭ふが如き青空である。淺間の玉容が日光に反射して一層鮮かに見へるが、これも天の惡戯であらう。

十、同　上　其の二　其の二　同日

帶レ颯振レ策淺山巓　雲霧横飛草吐レ煙
驟雨一過天似レ拭　玉容四映洗二餘妍一

颯を帶び策を振ふ淺山の巓、雲霧横に飛んで草煙を吐く。
驟雨一過天拭ふに似たり、玉容四映して餘妍を洗ふ。

讀んで字の如きものであるが、先輩詩宗は『奇恣縱横、控制すべからず、骨力の勁、鋒當るべからず』と評された。敢て當らない。

八月も末に近づいて最早や閑居五旬である。萩の花が亂れ咲き薄の穂も黄ばんで、秋の來たことが世界を見渡しつゝ

わかる。一人り青苔の路を踏んで行くと、一羽の鴻が九旻を渡つて行くのが見へるが、何だか自分がその孤鴻になつた氣がするのである。

十一、青苔を踏む　八月二十四日

野鶴閑雲領二五旬一　紫花黃穗識二秋臻一
孤高一氣青苔路　看盡孤鴻度二九旻一

野鶴閑雲五旬を領し、紫花黃穗秋臻を識る。
孤高の一氣青苔の路、看盡くす孤鴻の九旻を度るを。

これに對し某詩宗は『高青邱に似て氣宇更に高し、是れ詩人ならざるも骨韻珊然、故に人を驚かし得るのだ。』と評された。過褒といふのみである。

又岩崎翁が『大久保甲東論』を讀んだ所感を送られたので、これに次して二首を作つた。

十二、大久保甲東卿を憶ふ　其の一　八月二十六日

大略雄才夙絕儔　捨身報國翼二宏猷一
斯公去後無二英傑一　六十餘年一夢悠

大略雄才は夙に儔を絕し、捨身報國宏猷を翼く。
斯の公去つて後英傑無く、六十餘年一夢悠なり。

岩崎翁は

能從二藩主一策二良籌一　一意唯期奉二大猷一
志業半成猶未レ完　空將二天壽一附二悠悠一

と歌はれたが、私はかく歌つてみたのである。

十三、同　上　其の二　同日

旭旗所レ嚮照二乾坤一　無レ不二生民仰二至尊一
濺二血蔡橋一豈徒爾　捐レ生靖獻有二公論一

旭旗の嚮ふ所乾坤を照らし、生民至尊を仰がざる無し。
血を蔡橋に濺ぐ豈に徒爾ならんや、生を捐てて靖獻す公論有り。

今や旭旗が乾坤を照らして、その地域の生民は至尊を仰がない者はないが、これも甲東卿の如き維新の人傑が素地を作られたのである。それを思へば、卿が蔡橋々畔に於て島田一郎の爲めに刺されたことも決して無益ではなかつた。六十年後の今日、卿が生を捐て國に殉じられた偉勳は今や公論となつて明になつたといふのである。

山莊の生活は今年も例年と變りはない。大體午前六時起床、直ちに食卓について六時半からの放送を聽き、七時半頃から机に對して或は讀み、或は書き、午後亦これを繼續し、午後五時頃一浴、六時

の夕飯には麥酒の一本を傾け、又七時半頃から約二時間机に向ふのであつて實に淡々たる平凡の生活である。始めの約一ヶ月は獨居したが、間もなく二人の孫がその母と共に來つたので、この日課に多少の狂が生じたが、それでも讀書と執筆の生活に變りはないのである。ゴルフも止めた。別に理由はないが、唯だ時間が惜しいのである。遊ぶ時がないのである。一切の訪問も廢して終つた。門を出づれば、輕井澤至るところに先輩知友は多いのであるが、これを訪問すれば又來てくれることになり、お互に時間つぶしである。六句に亘る滯在中、こちらから訪問したのは、近衞、宇垣兩先輩の門を叩いたのみで、あとは用務を以て東京からわざ〳〵來た三、四の客に接したのみである。しかし、かくしても自分の欲する書を讀み、思想を錬るといふことはなか〳〵難しく、自ら顧みて耻づるところが多かつた。一日雨降つて手にしたのがガンジーの自叙傳である。彼の言葉を通じて、彼の思想の依つて來るところ、その無抵抗主義の眞相、彼が英國に於て如何に、而して何を學んだか、印度へ歸つて何をせんと欲し、何をしつゝあるか、その七十四年の生活を見ると頗る得るところが少なくなかつた。大正十一年に世界を周遊し、『改造途上の世界』といふ一書を公にした時、次代の世界を率いる者八名を掲げたが、その中にガンジーは獨自の見地を以て印度三億の生民を率いるであらうと喝破して置いたが、爾來僅かに二十年、私のガンジー觀は誤つてゐなかつた。

十四、雨窓巖峙（ガンジー）自叙傳を讀む　八月二十七日

芽花嫩紫動レ涼初　菊藥薄紅過雨餘
身毒高人世稱聖　靜中讀破快心書

芽花嫩紫涼動くの初、菊藥薄紅過雨の餘。
身毒（インド）の高人世聖と稱す、靜中讀破す快心の書。

これに對して先輩詩宗は『起承二句は絢爛、轉結二句は峭峻、世に達人有つて大觀して眼界が曠くなる。達人の書を讀んで、悟君の快心も亦歷然たるものがある』と評されたが、敢て當らずと卑下するに及ばない。

私は又林則徐の風格を偲ぶ者である。彼が敢然として阿片を燒却し、暴英の鼻柱をうち碎いたことは歷史に燦として殘つてゐるが、南京條約一百年を迎へるに當つて彼を想ふの情切なるものがある。先年北京に於て彼の揮毫にかゝる双幅を得たので、これを山莊に揭げて日夕親しんでゐるのであるが、その句に曰く『今年苦レ旱復苦レ雨、先生憂レ道更憂レ貪』と。そこでこの後の句を取つて起句としたのが次の詩である。

十五　南京條約一百年林則徐を憶ふ　八月三十日

先生憂レ道更憂レ貪　筆力雄渾鬼亦驚
後一百年魂似レ活　珠江江水舞三澎淪一
世界を見渡しつゝ

先生道を憂ひ更に貪を憂ふ、筆力雄渾鬼又泣む。

後一百年魂は活くるに似たり、珠江の江水漪淪舞ふ。

彼の書を見ると筆力雄渾で、鬼をも驚かしむると思ふ位のものがあるが、彼の魂は一百年後の今日も生きてゐるのである。生きてゐる證據には、珠江の江水には漪淪が舞ふてゐるではないかと讃めたのである。

これに對しても先輩詞宗は『史眼炬の如く、滿幅然へんとす、曾て阿片を焚き暴英の膽を挫く、吾が梧君をして百年前に生れしめば、必ず帷幄に走つて奥督の計に參せん。』と評されたのもおかしい。

八月末となつて顧みると、早や下山の日も近いが詩五十篇を得てゐる。流石に一夏の思ひ出であつて感無量である。良き妻、良き子、良き孫、良き嫁を得て私の清福は有難過ぎる。蕪詩五十成つて更に何をか望まう。これが冒頭に掲げたあの詩であるが、重ねてこゝに載せて置く。

十六、蕪詩五十篇　八月三十日

林外樵歸入暮煙一　倦レ詩一榻曲レ肱眠
六旬幽栖嬴何物　咳唾巴珠五十篇

林外の樵は歸つて暮煙に入り、詩に倦んで一榻肱を曲げて眠る。
六旬の幽栖何物をか嬴たる、咳唾の巴珠五十篇。

ところが九月に入つて又三首を得た。千篇一律で書するに足りないが、矢張りこゝに掲げて續けることゝする。まづ又々岩崎翁の玉韻に次した句である。

十七、岩崎翁の玉韻に次す

休レ道人生險似レ山　輸嬴唯有二一機間一
踏來坦坦長安道　不レ識何處世上艱

道ふを休めよ人生の險なる山に似たりと、輸嬴唯一機の間に有り。
踏來る坦坦長安の道、識らず何れの處にか世上の艱あらん。

人生は險なること山の如きものあるかも知れぬが、大道を歩く者には坦々として、何處に艱難があるかわからない、よし艱難があつたとしても、輸嬴得喪を超越した心境に在れば取るに足らぬのである。一路大道は安らけく長安に續くと申さねばならぬ。これが私の信念、否體驗である。

秋も深くなつて、稻の穗が實のつて、黄色の波をうつてゐる。辛苦した村人の喜び知るべきのみ。尙ほその上、輕井澤に集つた多くの人々も一人去り、二人散つて、今は徑を歩いても殆んど都の人らしい影を見ないのである。五歳になる長孫を携へて散歩すると、爽かな氣が天地に滿ちて私の衣に滴るやうに覺へるのである。

十八、秋郊漫歩

世界を見渡しつゝ

高原秋動客過稀　黃稻成レ波野色肥
小徑携レ孫漫步去　乾坤爽氣滴二吟衣一

高原秋は動いて客過ぐる稀れに、黃稻波を成して野色肥へたり。
小徑孫を携へて漫步して去れば、乾坤の爽氣吟衣に滴る。

又夕暮一人散步してゐると、蘆の穗は蓊蓊として生へ繁り、田の畦を埋めてゐる。赤白紫の秋の花が歷亂として鮮妍を競ふてゐる。全く蘆の穗と百花の間を縫ふて步くのであるが、早や暮れゆく闇の空に蛙の鳴く聲がするといふ實況を歌つたのが次の詩である。

十九、同　上　其の二

蘆穗蓊蓊畦畔塡　秋花歷亂競二鮮妍一
曳レ筇晚步高原路　閣閣蛙聲將レ雨天

蘆穗蓊蓊として畦畔を塡め、秋花歷亂として鮮妍を競ふ。
筇を曳いて晚步す高原の路、閣々たる蛙聲雨ならんとするの天。

(四)　後に

總じてこれを見るに、山莊を營んでより八年、冒頭に申した通り身も早や人生の秋の半に立たんとして、暫時でも閒居の味を味ひ得るやうになつたことは感謝であるが、世の轉變に會ひこの千載一遇の好機に當り、然も興亞一路五十年の步みを續け來つた者として、烈々たる氣魄の老いて益々盛んなるを覺へるのである。最近も亞細亞先覺者の傳として荒尾精、根津一、浦敬一、橫川省三、沖貞介の五人の名を擧げた書を見た。荒尾、根津、浦の三人は共に私の先輩であつて、殊に荒尾、根津の兩先生は親しくその敎を受けた師匠である。その偉大な足跡が最近漸く國民の閒にも讃仰せられて來たことは、眞に欣懷に堪へぬものがあるが、沖貞介君とは又不思議な因緣がある。

彼は私と同時代（明治卅年頃）東京專閒學校（今の早稻田大學）邦語政治科に在學してゐたが、一日突如として牛込東五軒町のわが梁山泊を訪ねて、私に訴へて曰く

『俺は神田の根本博士の漢學塾に起臥してゐるが、或る鹿兒島出身の男と爭つて決鬪を申込まれた。決鬪敢て恐れるのではないが、國家多事の際彼我何れが負傷しても大馬鹿であることに氣がついたから、泊めてくれないか。』

と。私は彼を我黨の士として交つてゐたから快く迎へ、梁山泊の一人に加へたのであつた。ところ

が彼は餘り勉强しない。學資も來ない。それでゐて酒を飲み、飲めば劒を拔いて柱を伐るといふ癖がある。

その頃、吾妻、松本兩君が善隣譯書館なるものを設け、早稻田叢書であつたブルンチユリーの國家學、ウイルソンの政治學、ミルの經濟學等歐米の政治經濟書を漢文に譯して支那へ送つてゐた。つまり日本式の漢文で支那文化を開發してゐたのである。當時我黨には康有爲一派の支那人が相當ゐた。文才一世を鳴らした梁啓超の如き、現駐日大使徐良君の父徐勤の如き、何れも同志としてこの仕事に贊意を表してゐた。そこで、一日私は沖に對し

『貴樣は學問をしても役に立ちさうもない。しかし、幸ひ支那に志を抱いてゐるのだから、この仕事に參加してその方で十分働くことだ。』

と言つたが、彼もその氣になり、やがて兩君の仲間となつて善隣譯書館の仕事に乘り出したのである。

この仕事はよかつたらしい。弊衣破帽の貧書生が一躍してフロックコートを着、馬車に乘つて往來するやうになつた。それだけならよかつたが、金の入るにまかせて、我々の蛇蝎視してゐた青樓にも上るやうになつたので、この漢、度すべからず絕交しろといふので、我々同志は暫らく彼の消息を聞かなかつた。何でも後に鑛山に手を出したとかいふことであつた。

明治三十四年春になつて、私は時來つて歐洲へ留學することゝなり、梁山泊を疊んで神田駿河臺の日昇館に假寓してゐると、或日ひよつこり彼が來た。もとの見すぼらしい姿である。絕交はしたといふものゝ、元より相許してゐた仲だから懷しさに堪へず、

『どうしたのだ』

と聞くと

『あれから一時はよかつたが、つまらぬ仕事に手を出して失敗して、もとの李阿彌となつて終つた。俺はやはり支那へ行つた方がいゝ、行くべきだ』

と答へる。私も

『それは當然である。支那へ行くのは貴樣の素志ではないか。橫道へそれたが、又もとへ戻つて來たのはうれしい。交りを戻さう。』

といつた。彼は旅費を都合してくれと要求するので、

『よし、それなら直ぐ長崎へ行け。長崎から電報を寄越すなら、俺の歐洲留學費の中から幾分か貴樣に贈らう。』

と約束した。間もなく彼は長崎から電報を寄越したので、私は北京までの旅費を電送し、私も直ぐ歐洲へ立つて終つた。

明治三十六年秋獨乙から歸つてみると、彼はその時も旅費を酒興に使ひ果し、翌三十五年漸く北京へ赴いたことがわかつた。しかし、今度は東文學舍で半教師、半學生として眞面目にやつてゐるといふことであつた。私は彼の爲めに前途を祝した。翌々年は日露戰役である。彼が軍事探偵として身を國家に捧げたことは有名であるが、私は日昇館で別れたのが最後であつた。

そんなわけで彼の風采は今も眼底に殘つてゐる。ハルビンを訪ねる毎に、所謂『志士の碑』に詣でゝ、彼を弔ふ。莊藏翁が平戸にその子貞介の記念館を建てられる時も相談を受け、心ばかりの援助をしたこともある。

こゝで特記したいのは彼の最期である。彼は松花江畔に於て銃殺される時、東方を拜し露兵を睨みつゝ死んだといふ。彼の先輩横川は露兵の爲すがまゝ、眼隱しをさせたが、彼はこれを拒絕した。横川はクリスチヤンである。横川には横川の信仰があつて、眼隱しをさせたかといつて決して卑怯だといふのではない。それで立派なのである。私は横川と沖とを比較しようとするのではない。唯だ沖の最期について述べるに當つて、一言横川に及んだゞけである。沖は我黨らしかつたといひたいのである。彼の半生には失敗もあつたが、その最期は美しかつた。そしてそれ故、彼は亞細亞の先覺者として歌はれるのであらう。

沖と同じ平戸の出身に菅沼貞風君がある。彼は年少圖南の志を抱きマニラに渡り、『マニラの麻以つて日本の旗をつなぐに足る』と叫んだが、コレラに罹つて二十五歳の若さで南溟の幽鬼と化した。そのマニラの麻も私とは因緣がある。大正十三年私が海興の首腦となつて、マニラを經てダバオに至つた時、この土地、この麻、日本人を植ゑるに足ると確信して歸り、同僚の二三氏が事業の前途を悲觀して寧ろダバオ放棄を唱へられるのを說得し、敢然積極的經營に努力し、十二年間に一萬の邦人を送つたのである。即ち貞風君の後を太田恭三郎君これを繼ぎ、太田君の後を私が繼いで後援したとも云へる。戰前南方在住の邦人は約三萬五千と稱されたが、その中約二萬はダバオに居つたのである。私はミンダナオが南方經營の一大中心點たる日の近いことを信じて疑はない。かくて貞風君の名も次第に世上に喧傳せられ、新に顯彰會が設けられ、大隈侯を會長としてその第一歩が踏み出されてゐる。

貞風君の弟周次郎君は、學生時代より沖と共に私の友人であるが、海軍少將で引退し現に佐世保に於て教育に從事してゐる。先日久しぶりで訪ねて來られ、歡談の時を持つたが、その時口をついで出たのが貞風君を弔ふの二首である。（以下二首、雜篇、第二、雜（下）に再揭出）

後に

菅沼貞風君を弔ふ　その一

餘生不レ願老二京華一　殘骨唯當レ埋二絕陲一、
名雋夙留南進句　遐洋今颺日章旗

世界を見渡しつゝ

盤レ空鶴健濤頭急　乘レ汐帆飛浪背夷
興亞同心君與レ我　幽明相隔護ニ皇基ニ

餘生願はず京華に老ゆるを、殘骨唯だ當に絕陲に埋むべし。
名鶴夙に留む南進の句、遐洋今は颺る日章旗。
空に盤るの鶴は健かに濤頭念に、汐に乘ずるの帆は飛んで浪背夷なり。
興亞同心君と我と、幽明相隔てゝ、皇基を護らん。

同　上　その二

意氣軒昂歷ニ日邊一　惜哉舉世不レ知レ賢
荷蘭屏剩肥洋嶋　瓊浦津通赤道船
後五十年遺略熟　東三萬里宿圖宣
絕溟欲レ酹人何在　眞韮灣頭雨似レ煙

意氣軒昂日邊を歷し、惜しい哉舉世賢を知らず。
荷蘭の屏は剩す肥洋の嶋、瓊浦の津は通ず赤道の船。
後五十年遺略熟し、東三萬里宿圖宣ぶ。
絕溟酹せんとす人何くに在りや、眞韮灣頭雨煙に似たり。

貞風君の著『大日本商業史』や『圖南の夢』は立派なもので、その人格が偲ばれるが、何といつても早く夭折された爲め、未だ事蹟らしいものを殘さなかつたといふ他はない。しかし、この盛運に際會して、亞細亞の先覺者として萬人に仰がれる所以は、やはりその高潔な人格の然らしめるところであらう。即ちその業に非ずしてその心に在りと言はねばならん。

これに就いても想ひ出されるのは、フイリツピン獨立の神と呼ばれるホーセ・リサールのことである。リサールは東亞のフイリツピンを叫び、僅か三十六歳にしてマニラで銃殺されたのであるが、その最期が沖貞介とよく似てゐる。彼も亦眼隱くしを拒み、後向きに立つたが、『射て！』の命令と同時にサツと身を廻轉して正面をきつたので、銃彈は心臟の正面を貫き、反逆扱ひの死を逃れた。彼は確かに東洋風な哲人の面影があつた。彼は又多方面の天才であつたやうだが、その死にはやはり國士の熱血が脉々として感じられる。今やフイリツピンがわが仁風に浴して、東亞のフイリツピンが實現さわつゝある時、リサールを思はざるを得ないのである。

餘談に亘つたが、人の一生は決して天壽の長短によるのではない。楠公は四十三歳にしてその肉體を大君に捧げたが、その七生報國の赤心は今に生きてゐる。松陰は三十歳にして君國に殉じたが、その英魂は今日猶ほ新しく生きてゐる。一心純潔であるならば、その人は永生不死の人として、永く後人の心に生きることを知るのである。

山莊の生活といふが、私にとつてはこの純潔なる一心を磨く修業道場である。日々新に日々又新、私は一日々々努力の日を送つた。この間最も私の心をひいたことの一つは、南方の計より進んで中央亞細亞、西亞細亞よりバルカンに及ぶ曾遊の地のことであつた。就中アフガニスタンは四十一年前、私の中央亞細亞旅行の當時には、ロシヤと英國の緩衝地帶であつたが、今や皇軍の威力の及ぶところ東進しつゝある獨伊と近く相見へるの機會も想像され、その位置は唯だ亞細亞の一獨立國のみならず、わが友邦として嚴たる存在たらんことが期される。昨春アフガニスタン倶樂部を發展解消し、アフガニスタン協會を創立するに當り、乏しきを享け會長の椅子を汚すに至つた私は、新に新進の七田公使の同國赴任に當り、協會の名を以つてアフガニスタン政府及び全國民にわが意を傳へることゝしたのである。公使は昨日東京を發し、伊勢參宮の後、一路シベリヤ鐵道により、中央亞細亞を經てカブールに赴任せんとしつゝあるのである。これ等のことを思ひ、又トルコが亞細亞西端の國として、ノルマントン沈沒事件以來、永き日土兩國の親交を思ひ、夙に日土協會を起し、畏くも高松宮を總裁と仰ぎ、兩國の親善に微力を捧げ來つた私として、トルコが速かに米英の關係より離れ、歐洲に於ける新秩序建設に協力することを個人としても望まざるを得ない。

かやうに感じ來れば、山莊の生活は決して閒ではない。先に五言律に於て『却つて識る隱栖の忙しきを』といふ句を吐いたが、隱栖は却つて忙しい、否な隱栖して初めて忙しきを識るのである。俗事に奔走し、物質に喜憂する輩にはこの忙なる所以がわからない。しかし、私は幽棲して朝夕神を天地有形の外に馳せ、思を風雲變態の中に伸べるのである。一心萬有を羅し、天地我と通ずるといふことを、嘗て鹽原で歌つたが、確かにその境地に在るに於て、極めて忙しいのである。次代の國家を擔當すべき青年は宜しく區々眼前の名利に左右されることなく、常に心を閑地に於て人生を把握し、永遠の生命を得なければならぬ。私が敢てこれ等の蕪詩を贈る所以も、いさゝかにてもその共鳴を得ることが、今日の時局打開に多少は役立つと思ふからである。

（昭和十七年九月十七日認之）

雜

篇

第一　雜（上）二十六首

一　偶拈

東京での生活は終始忽忙の生活である。殆んど詩作の暇もないが、世界を巡れば天地は濶く、而も草廬に歸臥せば、身も心も閑かなるを思つて偶拈した。

周遊天地闊　歸臥草廬閒
三顧南陽路　旭旗指蜀山

周遊すれば天地闊く、歸臥すれば草廬閒あり。
三顧南陽の路、旭旗蜀山を指す。

周遊すれば天地は闊く、歸臥すれば家は靜かである。孔明の三顧された南陽の路は、今やわが皇軍の進駐となつて、旭旗が巴蜀の山を搖がして居る。

二　井上一雄君の急逝を哭す

廿年村宰德聲隆　鄕黨一齊稱二厥功一
何事悲風吹折レ樹　雲籠二横獄一晝冥濛

廿年村宰德聲隆く、鄉黨一齊に厥の功を稱す。

何事ぞ悲風吹いて樹を折り、雲は橫嶽を籠めて晝冥濛たり。

分家の井上一雄君が、昭和十四年七月七日に五十四歲の若さを以て急逝した。彼は幼少の時父を失ひ、わが亡父に養はれ且つその家を整へられたもので、謂はゞ深き恩義をわが家に負ふて居るとはいへ、天性溫厚然も頭腦明晰、前後二十年餘に亘つて助役、次で村長として村を治めたのみでなく、わが家の爲にも、私に代つて治めてくれたので、私は最も力を落した。そこで此の句を靈前に呈したわけである。

葬儀は彼の造營した小學校庭に於て、村葬を以て營まれたが、結句は直ぐ眼前に聳へた橫岳に雲がかゝつて、晝尙ほ暗らかつた實況を捕へたものである。丁度その頃は燒けつくやうな暑さで、久しく雨無く、農家は天を仰いで嘆息して居たが、十一日に至つて珍らしく迅雷が沛雨を呼んだ。

三　喜　　雨

一天七月不レ看レ雲　旱魃跳レ空暑似レ焚
忽有三迅雷二呼沛雨一　桑畦稻隴色欣欣

一天七月雲を看ず、旱魃空に跳り暑焚くに似たり。
忽ち迅雷の沛雨を呼ぶあり、桑畦稻隴色は欣欣。

九月に入つて日本倶樂部の詩友今北守拙君が急逝された。彼は曾ての專賣局長官であり、後長く日本銀行監事を勤めてゐた。直ちに彼の邸を弔つたが、矢張り詩友の平野天江君が彼の遺稿を編纂するに當つて、次の二絕を贈つた。

四　詩友今北守拙君を悼む　其の一

百事經營六十年　功成致レ仕賦三歸田一
訃音忽到腸將レ斷　寂寞詩壇誰又憐

百事經營す六十年、功成り仕を致し歸田を賦す。
訃音忽ち到つて腸將に斷たんとす、寂寞の詩壇誰か又憐まん。

五　同　　其の二

鷗鷺盟新恰稔知　官人凌駕野人詩
英雄回レ首神仙邊　白玉樓頭點三玉姿一

鷗鷺盟は新に恰も稔知、官人凌駕す野人の詩。
英雄首を回らせば神仙邊たり、白玉樓頭に玉姿を點す。

名古屋は荒尾先生生誕の地である。先生の名は事變以來急に浮び上つて來たが、故鄉の人々は案外その名も知らない。勿論濃尾からは古來幾多の英雄が輩出してゐる。豐臣秀吉然り、德川家康然りで世界を見渡しつゝ、

ある。先生は名古屋に生れたとはいへ、幼にして東京に移轉し、更に鹿兒島の人となり、故郷に親しみが少なかつたからかも知れない。しかし、私が先生の傳を出版したのは、既に三十年の昔であり、谷中に於ける先生の墓は、その友人、門下によつて常に掃ひ清められ、京都若王子山下の舊居には先代近衛公の撰文による記念碑が嚴として立つて居る。更に遠く上海同文書院の廣場に建立された靖亞神社には、第一祭神として祭られたのみならず、最近新に先生の傳が未知の人によつて著されるといふのである。そこで私は名古屋の人に、先生の顯彰會を起さしむ可く、主なる人士と折衝中の處、九月二十八日同市商工會議所に於ける有力者の會合に招かれ、是に赴いたのであつた。車中仲秋の月が團々として輝いてゐるのを車窓から眺め、思を當年に致し、先生との一夕の歡談が遂に鹿ヶ谷梁山泊の基となり、又私の一生の方向を支配する起源となつたことを回想して感慨無量であつた。乃ち一絶を賦した。

六　名古屋行車中、故東方齋先生を憶ふ

欲レ彰二先賢一向二中京一　大月團團照レ眼明
獨座無寒無暑處　想馳當年洛東盟

先賢を彰さんとして中京に向ふ、大月團々眼を照して明なり。
獨り座す無寒無暑の處、想は馳す當年洛東の盟。

此の詩に次して、同じく東方齋崇拜者の一人である小松謙堂君は、左の二絶を贈られた。

其の一

白露金風滿二錦京一　行看一路月華明
君將二筆舌一傳二芳躅一　彰二表先賢一尋二舊盟一

其の二

輕車載レ筆到二中京一　彰二表巨人一功績明
泉下先師應二嘆美一　門生好漢不レ忘レ盟

越へて十四年冬の議會になつて、同縣の舊友、同時代に議政壇上に馳驅した天城齋藤君が侃諤の論陣を張つて、是が累をなし遂に議席を拋つに至つたのであるが、彼は歳晩小詠として

吐レ丹議政遂無レ功　三十星霜一夢中
世路崢嶸年將レ暮　寒梅盎裡待二春風一

といふ詩を賦して懐を遺つたので、是に次したのが左の一絶である。

七　齋藤天城君の歳晩小詠に次す

丹心許レ國豈期レ功　侃諤卅年論政中
不レ似二人生行路險一　寒梅凌レ雪立二春風一

世界を見渡しつゝ

丹心國に許す豈に功を期せんや、侃諤卅年論政の中。

人生行路の險に似ず、寒梅雪を凌いで春風に立つ。

君は『寒梅盞裡に春風を待つ』と言はれたが、私は『寒梅雪を凌いで春風に立つ』と歌つた。春風を待つのではない、春風に立つて居るといふのである。彼の境地からすれば待つのであらうが、彼の境地を讃える私としては立つて居ると酬いたのである。

昭和十五年四月十日、詩友と共に船を隅田河畔に繫いだ時の一首がある。

八、花汀船を繫ぐ

櫻雲霧鎖枕橋頭　置酒高談忘二百憂一
紅日西傾泛レ江去　飛花汀上又維レ舟一

櫻雲は霧鎖たり枕橋の頭、置酒高談百憂を忘る。
紅日西に傾き江に泛んで去り、飛花汀上又舟を維ぐ。

枕橋から船を隅田河に浮べてみると、堤上には落花が繽紛として居る。夕方になつて再び船を繫いで、置酒高談したのであつた。

詩會の題として出たもの二三を、雜の部に入れて置かう。

九　溪樓讀書　其の一

一溪泉響遶二樓居一　快誦聲高天地虛
報紙日傳歐西捷　問レ君德師讀二何書一

一溪泉響樓居を遶り、快誦聲は高く天地虛し。
報紙日に傳ふ歐西の捷。君に問ふ德師何の書を讀む。

十　同　其の二

樓見二青嵐紫靄圍一　崖邊林色映二書幃一
黃鸝啼裏泉聲近　讀到二南華一興欲レ飛

樓は青嵐紫靄に圍まれ、崖邊の林色書幃に映ず。
黃鸝啼裏に泉聲近く、讀んで南華に到つて興飛ばんとす。

二つ共、溪樓讀書の氣持を歌つた。其の一の『君に問ふ、德師何の書を讀む』とは、ドイツが連勝する所以は何れにありやと喝破したのである。

更に『水亭月を見る』と題して、同じく二首を得た。

十一　水亭月を見る　其の一

曾吟亞普（アルプス）最高寰　又嘯安泥（アンデス）第一山
小小水亭今縮レ首　波心涵看素娥顏

世界を見渡しつ、

曾つて吟ず亞普最高の寰、又嘯く安泥第一の山。
小小たる水亭今首を縮め、波心涵して看る素娥の顏。

十二　同　　其の二

廈樓斯夕酒爲レ媒　邀レ月吟朋共把レ杯
醉色阿誰尤照レ座　清光萬里爲レ君開

廈樓斯の夕酒媒となり、月を邀へ吟朋と共に杯を把る。
醉色阿誰尤も座を照す、清光萬里君が爲めに開く。

曾つてアルプス最高のところに吟じたこともあり、アンデス第一の山に嘯いたこともある。世界を家とする身が、今日は水邊の小亭で首を縮めて、波心に美しい月の顏を看るといふのが其の一で、其の二は廈樓斯の夕詩友集り、酒が媒介となつて、月を邀へて共に盃を把つて居る。一座を見渡したところ醉つた男は誰であるか、仰ぎ見れば清い光が萬里、君が爲めに開くといふのである。

秋の一日、竹潭中島男爵が雨後の吹浦の鹽海樓から葉書を寄せられた。曰く、

復無二一事贊二皇猷一　昨愧二不才一今白頭
北海孤樓倚レ欄處　波心極目是何州

と。そして雨後吹浦湯田溫泉に投じたところ、偶〻壁間に梧堂先生の一絕が掲げてあつたので、是

に次したと附加へてあつた。そこで當年を回想してみると、昭和二年の夏である。移植民奬勵遊說の爲め東北に遊んだ私は、吹浦の青年諸君に二場の講演をした後、臨海樓に一泊したが、主人の請に應じて惡筆を揮つたのであつた。それは

敢言微賤贊二皇猷一　身在二蜻州北盡頭一
浴後憑レ欄瞰二滄海一　涼風吹起是何州

といふのである。是が十三年の後、竹潭大人の眼に留つたのであらう。そこで舊韻に次して大人に贈つたのが次の詩である。

十三　中島竹潭大人に贈る

山人豈謂贊二皇猷一　憂國忡忡欲二白頭一
看盡燕山吳水後　夢遐羑羑直南州

山人豈に謂はんや皇猷を贊せんと、憂國忡忡白頭ならんとす。
看盡す燕山吳水の後、夢は遐かなり羑羑直南の州。

詩稿を整理して居ると、次のやうなものも出て來た。

十四　杜鵑花を看る

綠茸簇滿二春山一　淡紫深紅點點斑
世界を見渡しつゝ

自喜超然塵界外　錦心一展麗妝嫺
綠茸簇簇春山に滿ち、淡紫深紅點點として斑なり。
自ら喜ぶ超然塵界の外、錦心一展麗妝嫺なり。

杜鵑花が塵界に超然として、誰に媚びることなく、又知らるゝを求めることさへなく、その麗妝をありのまゝに露呈して居るのを歌つたのである。

又、月の夕、櫻花を見ては

十五　月　夕　櫻

風雲自レ古起二英雄一　花月來今任二碧翁一
併得今宵花與レ月　陽春天地畫圖中

風雲古より英雄を起し、花月來今碧翁に任す。
併せ得たり今宵花と月、陽春の天地畫圖の中。

と歌つてみた。花を見ても英雄を思ひ、月を見ても人傑を想ふ。是も作者の癖か。呵々。

更に水郷春望と題して

十六　水　郷　春　望

望裏盪槹娘是仙　剪レ波楚楚入二春煙一
鼇尼斯景依依是　新月型舲新月天

望裏の盪槹、娘是れ仙、波を剪つて楚楚として春煙に入る。
鼇尼の斯の景依依として是なり、新月型舲新月の天。

とやつてみた。是は私の句としては、些少脫線氣味だと人は言ふであらう。

昭和十五年十一月十、十一日。紀元二千六百年の祝典に當り、私共夫妻は表彰の典に浴し又式に參列の榮を得たので、恭々しく賦して地下の兩親に報告した。

十七　紀元二千六百年祝典に列して

相携恐尺拜二天顏一　又辱二表彰一感淚潸
耳順猶存風樹嘆　無レ由泉下寵恩頒

相携へて恐尺に天顏を拜し、又表彰を辱うして感淚潸たり。
耳順猶ほ存す風樹の嘆、由無し泉下に寵恩を頒つに。

六十歳を越へても親は懷しいものである。私共は式典に列した上、表彰の光榮をさへ辱うしたが、此の喜びを地下の兩親に頒つことが出來ないのが殘念だと嘆いたのである。

又、此の佳節を機として神武の陵が修築され、國民崇敬の的となつて居ることは申す迄もないが、皇兄五瀨命が大和に於て戰死なされたことが、私共の腦裡に蘇つて來るのである。命をお祭り申上げ

る神社も新しく出來上つたことを拜して、恭々しく歌ひ奉つた。

十八　五　潮　命

征虜蒙レ瘡　扼二險弓一　慨哉撫レ劍　豹韜空
皇兄壯烈若　開却　爭識　祖宗經國　崇

征虜瘡を蒙りて險弓を扼し、慨哉劍を撫して豹韜空し。
皇兄の壯烈若し開却せば、爭でか識らん祖宗經國の崇きを。

昭和十六年二月、炎南より歸つた私は、一夜、水樓に詩友と會した。その時の一絕。

十九　春　望

旋自二圖南炎土一來　飛機銀翼半天開
海樓雲表顧二鴻爪一　一夢皇州花作レ堆

旋つて圖南炎土より來り、飛機銀翼半天に開く。
海樓雲表鴻爪を顧み、一夢皇州花堆を作す。

花が到る處堆を爲してゐる實況を述べたのである。

二十　春寒酒に對す

弧南一駛任二飛機一　敲破天空海濶扉
故國殘寒梅照レ酒　先迎萬里熱洋歸
弧南一駛飛機に任せ、敲破す天空海濶の扉。
故國の殘寒梅酒を照らし、先づ迎ふ萬里熱洋より歸るを。

是も詩友と酒に對して、春寒を歌つたものである。

又、春の一日、夫妻、幼孫を伴ひ、小田急の西生田に在る女子大學新校庭に清遊した。此の地は廣袤十三萬坪、老松巨柏が處々に聳へ、山あり谷あり畠あり水田あり、特に最近は神奈川縣の幅七間の縣道が學園の右側を巡つて新設せられ、建築も漸次に進み、高貴な方々の御檢分もあつた。此の日は暑からず、寒からず、群巒の峙つ處、悠々青を踏んで緩歩したが、晝には林間で携ふる所の行厨を開いて午餐を共にし、樂しい半日を送つた。

二十一　西　生　田

春日不レ喧還不レ寒　玉川西去峙二群巒一
行行緩歩踏レ青到　林下擁レ孫俱一餐
春日は喧ならず還た寒ならず、玉川西に去つて群巒峙つ。
行行緩歩青を踏んで到り、林下孫を擁して俱に一餐。

三月初め住友總理事簡齋小倉正恒翁から大阪の財界人に南方談をして欲しいとの希望があつたので、世界を見渡しつゝ、

承諾して置いたが、三十一日午後四時から愈々その會を開くことになつたので、三十日夜東京を發した。翌朝大阪着、午前中、關係方面を歴訪、午後、新大阪ホテルに赴いたところ、小倉翁と商工會議所會頭片岡安博士兩君の名前で、財界一流の人士約二十余名が參加されたことがわかつた。午後四時半開會、片岡博士の挨拶後、私は二時間に亘つて『南進の心構へ』を話題として、大阪財界人が進んで南方に業を起し、以て南進の實を擧ぐることを希望したのである。講演後一同食卓に就いたが、デザートに入るや、簡齋翁から熱意を凝めて私の所論に共鳴の意を表せられ、八時半衆散じたが、翁を初め古田現總理事其他住友主腦部は最後迄、別室に入つて互に眞摯なる談話を交換した。斯くて午後九時四十分發で歸京の途に就いたが、翌れば四月一日早曉フト眼を覺すと、列車は駿河灣に沿ふて東行しつゝあり、窓を開けば白雪皚々たる富士山が一層高く見へ、何ともいへぬ崇高な景色であつた。

二十二　歸京車中　其の一

暮年壯志截二雲濤一　一夜華城結二後髦一
春麗車窓東海曉　仰看維嶽忽焉高

暮年壯志雲濤を截り、一夜華城俊髦に結ぶ。
春は麗かに車窓東海の曉、仰ぎ看れば維嶽忽焉として高し。

いかにも富士山の高いのを覺へたのであるが、犀東詩宗は『忽焉として高しより一層高し』とするべきだと言はれた。成程、左樣であらう。そこで次のやうに朱を入れられた。

二十三　同　其の二

暮年壯志蹴二雲濤一　忽訪浪華當代髦
載レ夢回車東海曉　麗春維嶽一層高

暮年の壯志雲濤を蹴り、忽ち訪ふ浪華當代の髦。
夢を載せて回車す東海の曉、麗春維嶽一層高し。

三十日の夕刊に簡齋翁入閣の報が傳はり、翌朝の新聞にもその記事が出て居た。聞けば翁は午前、午後に亘つて會社の主腦部を集めて會議を催されたとのことで、新大阪ホテルに來る前に受諾の意を決されたのであらう。翁はかゝる身邊多忙の日に拘らず、午後四時から九時迄五時間の長きに亘つて主催者としての好意を示されたのは、感謝の至りであるのみでなく、その重厚な資質が現はれてゐて床しい。

又、此の三月三十日は亡父の第十七周忌に當つてゐるので、鄉里の分家に墓參を代行せしめ、私共東京在住の者は好機を期して歸村法要を營む豫定であるが、四月の或る日、長男夫妻、長女並に次女夫妻、二人の幼孫を集めて亡父母の寫眞を拜し、敬神崇祖がわが家の法であることを說き聽かせて、しめやかなる團欒を終つた。其の時に卽吟した一絕は、是を書して三兒に贈つた。

二十四　先考十七周忌賦して兒に示す

仙逝蒼蒼十七春　墓門掃盡不レ留レ塵
克忠克孝吾家法　子子孫孫愼敬神

仙逝蒼蒼十七春、墓門掃ひ盡して塵を留めず。
克く忠克く孝吾家の法、子子孫孫愼んで敬神。

自家のことを吹聽するやうで氣耻しいが、私共の今日あるは上御一人の雨露によることは申す迄もなく、鄕黨の恩、師友の恩、社會の恩に負ふところが多い。しかし一面祖先の恩も忘れてはならぬ。わが鄕は戸々勤儉風を爲し、質實克くその家を治め、村に一人の落伍者なく、克く祖宗の業を守つて家を治めて居る。わが家は四百年前、光秀の討伐に當つた井上出羽守の二兒が戰陣の間に仆れ、其の後が一は隣村竹田村に居を定め、一はわが山田の部落に家を卜し、子々孫々繁殖して今に至つたといふことである。井上一族として、同姓を名のる者は數十戸に及んでゐるが、わが家の屋後小高い丘、老松巨柏の森々たる中に小さな宮がある。是が多年の風雪にさらされて來たので、新しく建立することを計劃し、此の五月迄に竣工の豫定である。祖先の二百年祭、亡父の十七回忌にその冥福を祈ると同時に、井上神社の新築も一同と共に祝ひたいと思つてゐる。（昭和十六年四月二十一日認之）

日本倶樂部漢詩會の五月課題は『池亭聽蛙』と云ふのであつた。そこで左の二絕を卽賦して坐客の一粲を博することとした。

二十五　池亭蛙を聽く

歸レ自二炎南萬里程一　池亭舒嘯一身輕
蛙兒太似レ慰二岑寂一　坐斷荷風葉上鳴

炎南萬里の程より歸り、池亭に舒嘯して一身輕し。
蛙兒太だ似たり岑寂を慰むるに、坐斷す荷風葉上に鳴くを。

二十六　同　其の二

池塘經レ雨柳含レ煙　晚景涵レ漪月上レ弦
遠巷送二他絲竹閙一　蛙聲助レ靜遶二詩筵一

池塘雨を經て柳煙を含み、晚景漪を涵して月弦に上る。
遠巷他の絲竹の閙を送り、蛙聲靜を助けて詩筵を遶る。
蛙兒の荷風葉上に鳴くを坐斷するもよく、蛙聲靜を助けて詩筵を遶るのも亦風流であらう。

（昭和十六年五月十五日追記）

雜（下）

昭和十六年春より十七年春　六十五歳より六十六歳　二十三首

一　昭和十六年雜詠

五月十八日に長男陽一はドイツ赴任の途に上り、同じく二十一日家妻秀子はドイツの招待を受け我婦人代表としてベルリンに於ける國際大會に赴くべく東京を發つた。そこで

一　妻拏前後、獨逸に之れを送る

昨送二嫡男一今老妻　長風萬里任二航梯一
驛頭臨レ別無二他語一　刮目北歐隆可レ稽

昨は嫡男を送り今は老妻、長風萬里航梯に任す。
驛頭別に臨んで他語なし、刮目す北歐の隆稽ふ可し。

昨は嫡男を送り、今は老妻、長風萬里航梯に任す、驛頭別れに臨んで何も言ふことは無い。汝等は宜しくドイツが如何にして志氣を擧揚せしめたか、如何に歐洲の新秩序建設に當つておるか、青年の氣持は如何、婦人の責任は如何を、仔細に觀察して我國家の隆運に寄與すべきであると言ふ意味を謳つたのである。これに對し先輩詩人は『縱横倜儻、送レ嫡餞レ婦、猶且若レ斯、一家存養、足レ味二一臠一』と評せられたことは却つて恐縮の至りである。

五月二十八日には小田原の元の滄浪閣の蹟に公の胸像成つた。招かれて之に赴き、乃ち賦して『川島主人に示す』と題し、次の一首を讀んだ。

二　川島主人に示す

卓犖明治第一人　偉勳赫灼世無倫
滄浪閣阯新二胸像一　颯爽英姿壓二四鄰一

卓犖たる明治第一の人、偉勳赫灼世に倫なし。
滄く閣阯胸像新に、颯爽たる英姿四鄰を壓す。

言ふ迄もなく春畝公は明治大帝の殊遇と享け新日本を建設したる第一人者である。私は知る人ぞ知る通り、公の拔擢を蒙り韓國宮中改革に當りたるものとして公の推輓を蒙つた一人であり、公のことは常に我が胸中に往來して居る。この一絕に對し又先輩詩人は『箇の英雄を捉へて、得意吐屬、詩に氣骨あり、像に匹儔無し』と評せられた。

東京には明治二十八、九年即ち領臺當時臺灣にあつた連中の舊交を溫むるがために設けられておる舊雨會なるものがあつて、毎年一回領臺記念日に會合して當年を偲ぶのであるが、今年も亦六月十七

日に例年の如く丸ビル八階の精養軒でこの會を催した。集なもの十三、四名、列席者の最年長者は陸軍大將大井成元男、當時の總督府參事官木下新三郎翁の七十九歳を始めとし、若い所で七十二、三歳の電通社長光永星郎代議士、田川大吉郎、元代議士野間五造氏等で、一番の若年は私である。昨年迄は九十幾歳の後藤松吉郎、又八十幾歳の木村匡翁等の出席を見たが、此等は早や白玉樓中の人となり、大井、木村兩氏等が生殘りの長老である。この日は最年長の兩氏と最年少の私が感想談を述べたのであつた。

三　舊雨會席上

結髮從レ軍一劍雄　拓二開荊棘一絢二蕃戎一
星霜四十六年後　俠骨依然氣吐レ虹

結髮軍に從つて一劍雄に、荊棘を拓開して蕃戎を絢ふ。
星霜四十六年の後、俠骨は依然として氣虹を吐く。

この意味は私の渡臺したのは十九の年で、長髮を結んでおり、しかも臺北にある十數日、蠻民撫育係として深く蠻界に入り、埔里社に駐在すること約半年、明治二十九年の正月元日は臺北に於ては土匪蜂起して城門に迫るのことがあつたが、我が埔里社に於ては霧社（後年霧社事件の起つた所）の頭目と兄弟の約を結び、これを歸順せしめて埔里社政廳に招いたその日である。時を閲すること四十六七年、昭和十一年に久しぶりに埔里社を訪ひ濁水溪上流を溯つて霧社蠻の現狀を探つたことであつたが、去る十六年十月の末、臺灣總督の招請に應じ臨時臺灣經濟審議會に出席したる後、又々濁水溪を溯つて日月潭に上り蠻民の舞踊を見るなどして當年を偲んだことであつた。幸にして今日と雖も俠骨依然として氣虹を吐くと言ふ樣な句が出るのは天恩の有難さで感謝せずには居られないのである。これに對し先輩詩人は『誦し來つて豪宕その人を看るが如く、意氣山の如く、中に猛心を藏す』と評されたことは敢て當らずと雖も四十六、七年後の今日でも身と心と共に頑健にして世界を家となしつつあるは感激感謝の外ない所である。

田川大吉郎君が舊雨會席上の拙詩に對し寄せられたのが次の一絕である。

梧堂先生に寄す

不レ羨京華粉黛雄　去披二棘莽一撫二南戎一
如今那處風雲急　又搜二蘭印一氣似レ虹

又本年に入つて海軍同級生の會合を六月十八日に水交社で開催した。我々の同級會は明治二十六年江田島兵學校に共に學んだ同志であつて將校、機關兩科を併せて三十八名中、生存しておるものは僅かに十四名で、三分の二の二十四名は既にこの世の人ではない。年を閲する今に四十九年、これら青

年時代の同志はしば〳〵校内にある八方園に上つて號令の稽古をし又は靜座して練膽をしたことを想起し、又日曜日には江田島對岸の能美島あたりに散策し、或は同級生のクラブに相集つて膝を交へて天下國家を論したのである。この當年の同志が今や十の三を餘すのみとなつたと言ふ意味を謳つて第四首を得た。

四　海軍同級會席上

八方園上靜中多　能美洲邊促レ膝談
四十九年眞一夢　同人今剩十之三

八方園上靜中に多し、能美洲邊、膝を促して談ず。
四十九年眞に一夢、同人今は剩す十の三。

そこで八方園上靜中に多し、能美洲邊、膝を促して談ず、四十九年眞に一夢、同人今は剩す十の三、全くの實感でこれに對して或人は『兀傲の氣、沈刻の意、口に信せて衝き出づ、魁壯よろこぶべし』と評せられた。

私は明治二十五年十二月で滿十五年十ヶ月であるのを十六年六ヶ月と戸籍面を繰上げて入學資格を得、千三百の志願者中採用人員僅か二十人の所を十九番で幸ひ入選さるゝことを得たのであるから、從つて一番の年少者であり、同級の者は今や多くは六十八九歳、中には七十歳を攀ぢておるものもあるわけであるが、本年に入つて引續き三名を失ひ、剩す所の十四名も果してどうであらうか。かく觀じ來れば最少年者とは言ひながら、なほ頑健にして多少の力を國家民人に盡すを得ることは之れ亦感謝の他は無いのである。

六月某日郊外に出で、富士山を望んで左の一首を得た。

五　郊行望山

幾向二紅洋熱圈一行　男兒志業在二長征一
郊行望レ嶽恢二胸宇一　湧起圖南萬里情

幾びか紅洋熱圈に向つて行き、男兒の志業は長征に在り。
郊行嶽を望んで胸宇恢く、湧き起す圖南萬里の情。

これを更に同韻で謳つてみたのが第六首である。

六　同　　其の二

乘レ槎定遠憶長二征一　幾試青山碧海行
今日郊遊仰二靈岳一　圖南萬里最關レ情

槎に乘じて定遠長征を憶ひ、幾ひか試む青山碧海の行。
今日郊遊して靈岳を仰ぎ、圖南最里最も情に關す。

世界を見渡しつゝ、

之に對して先輩詩人は亦『千篇萬首、一串扼腕、意氣軒昂、老の至るを知らず本來の面目永へに此處にあり、他若し道破せば狒猴の冠するに似たるも一度、君の吟に上れば自ら陳言套語ならざるあり』と評せられたが、敢て當らずと雖も自己の胸中に鬱勃たる氣魄は物に觸れ、事に感じて自然に流露するのも可笑しい。即ちこの詩に謳ふ如く何遍も世界を歩いたが男子の志業は長征にある。今日眼前に富士の靈峯を望むと胸宇が恢くなり、覺えず圖南萬里の情を湧き起すのである。

班定遠は西域に使した有名な人物であるが自分は船に乘つて遠征する毎にこの男を偲ぶのである。幾回か青山碧海の行を試みたのであるが、今日郊外に遊んで富士の靈嶽を仰げば、今や我國民は擧て南方を望んで居る。過去三十餘年に亘つて南進の實踐者であつた自分は、この問題が即ち、圖南萬里の情が最も心に關はると言ふのである。

十月五日は所謂仲秋に當り横濱港外の海に臨める所謂臨海樓に詩友と共に雅宴を開いた。折から滿月が東海より出でゝ何んとも言へん光景であつた。そこで三首を得た。

七月前觀瀾

風色一年佳絶秋　雅筵對酌水邊樓
任地澎湃濤將ゝ怒　大月團團照三酒甌一

風色一年佳絶の秋、雅筵對酌す水邊の樓。
任ず他の澎湃たる濤、將に怒らんとし、大月は團團として酒甌を照らす。

今日は一年中の最も佳絶の秋である。そこで詩友相會して水邊の樓で一杯を汲んで詩會を催した。澎湃たる怒濤が太平洋を洗つて居るけれども何かあらん。今晩は團々たる大月が酒甌を照すを見たのである

早や聖戰五年、なほ兵火熄まない。丁度この頃は我皇軍が湖南の長沙を奪取したときで、貔貅が遙かに楚天卽ち湖南の風を吹き捲くつて居る。今宵、横濱灣頭の月も同じく湖南瀟湘の雁渚の筵を照しておるであらうと言ふのが第八首である。

八　同　　其の二

聖戰五年猶事ゝ戎　貔貅遙捲楚天風
今宵金港灣頭月　同照瀟湘雁渚筵

聖戰五年猶ほ戎を事とし、貔貅遙かに捲く楚天の風。
今宵金港灣頭の月、同じく照さん瀟湘雁渚の筵を。

更に憶ふ今宵は端的に月玲瓏としておる。來る夜の清光を待つまでもない。今宵を十分に味ふべしと言ふ意味を表したのが次の句である。

九　同　　其の三

世界を見渡しつゝ

煙波縹緲望無窮　　聞促雅朋追庾公
不要清光待來夜　　今宵端的月玲瓏

煙波は縹緲として望み窮りなく、聞に雅朋を促して庾公を追ふ。
要せず清光來夜を待つを、今宵端的に月玲瓏たり。

犀東詩宗は『清雅幽峭、筆光靈あり、三首皆佳、第三、押して甲とす』と評された　固より敢て當らない。

二　昭和十七年雜詠

海軍協會主催の東鄕神社大東亞戰爭完遂祈念祭が催された。是に私も列席したが、一詩を得た。

一　東鄕神社祈念祭

東摧西破快如鵰　　赫奕偉勳傾大千
神武以來無此事　　仔徠衆庶跪神虔

東摧西破快鵰の如く、赫奕たる偉勳大千を傾く。
神武以來此の事無く、仔徠の衆庶神に跪いて虔し。

三亙國分漸庵翁が八十歳自祝の詩を寄せられたに就き次韻した。

二　漸庵翁玉韻に次す

不追名利壽而康　　出處行藏自有方
大道行來坦如砥　　杖朝钁鑠鬢無霜

名利を追はず壽にして康、出處行藏自ら方有り
大道行き來つて坦として砥の如く、杖朝钁鑠鬢に霜無し。

漸庵翁とは在韓時代よりの舊知にして、退官後翁は二松學舍を宰し、八十歳にして猶ほ黑髮卽ち鬢に霜無しである。珍らしい强健なる方として、こゝに祝辭を述べたのである。

三　山家初春

南灣波熨北厓園　　半腹一莊凭翠微
亦是山家樵舍趣　　訪春鶯侶叩梅扉

南灣の波は北厓を熨して園み、半腹の一莊翠微に凭る。
亦是山家樵舍の趣、訪春鶯侶梅扉を叩く。

是は息心海莊の一時を歌つたもので、春が來て翠微の海莊に鶯が訪れるといふのである。

四　岩田九十三翁洗心錄を贈らる、一詩を賦して是を祝す

遐齡九十又加三　　豐頰如童鶴髮毵
世界を見渡しつゝ

一卷洗心修養錄　長生秘合二箇中探一

遐齡九十又三を加へ、豐頰童の如く鶴髮毵たり。

一卷の洗心修養錄、長生の秘は合に箇中に探るべし。

岩田翁は國分八十翁よりも十餘歳の長者で珍らしき人である。翁の令息は私にとつて三十年來の友人であつて、現にわが昭和ゴム會社の常務である。

五　霞町に舊を思ふ

青山塋外昔僑居　破帽短裘心豁如
五十年前春的歴　何邊可レ覓舊蝸廬

青山塋外の昔僑居、破帽短裘心豁如たり。
五十年前春は的歴、何の邊にか覓む可き舊蝸廬。

海軍兵學校入學以前、芝の攻玉社に在學中私は青山墓地の畔、霞町一番地のさゝやかなる土佐藩出身の一老婆の宅に寄寓してゐた。破帽短裘素足で通學したものであるが、その邊を過ぎる毎に當時を追懐して、何ともいへぬ懐しさを覺える。先頃又電車でそこを過ぎた。五十年の昔のことであるから、勿論、その家は求む可くもないが、幸に此の一首を得たのであつた。

六　鯉　幟

五月晴空萬綠濃　飄颻鯉幟半天衝
二孫孩幼期二他日一　應有二跳騰魚化一龍

五月の晴空萬綠濃かに、飄颻たる鯉幟半天を衝く。
二孫孩幼他日を期し、應さに跳騰して魚龍と化するあらん。

端午が近づいたので、二孫の爲めに鯉幟を求め來つて樓上に揭げた。

鯉も幾度か激流を跳び越へる中には仆るゝものが多く、目的地に達するものは少ないといふことである。しかし、最後まで泳ぐものは一躍して龍と化すといふことも聞いてゐる。二孫も亦その鯉の如く、幾多の艱難を突破して龍となるがよろしい。是が祖父としての私の願望である。

今回の總選擧に當り、わが兵庫縣からは齋藤隆夫、若宮貞夫兩君の他に山川賴三郎君が出馬された。齋藤、若宮兩君の地盤は但馬であり、私の舊地盤は丹波二郡である。私の跡を繼いで、山川君は二回當選されたが、今回は第三回目の推薦候補であつた。然し、期日が迫るにつれて佐々井、木崎兩候補が躍り出てなか〳〵の苦戰だといふので、しきりに私の應援を求められる。同君は大正九年又び十三年の兩回に亘る私の立候補に際し、或は郡會議員として、或は縣會議員として應援をしてくれた因緣があるので、誼辭すべからず、是が應援の爲めに久しぶりで故鄕の父老や青壯年諸君に對したのであるが、私が政戰に參加するのは二十年振りである。そこで左の句を吐いた。

七　應援途上　其の一

逐鹿中原委後人　南方建國寄斯身
追懷政戰當年跡　忽忽已經二十春

中原に逐鹿するは後人に委し、南方建國に斯の身を寄す。
追懷す政戰當年の跡、忽忽已に經たり二十春。

中原に鹿を逐ふ仕事は他人に委せて、私は唯だ南方建國のみに沒頭して來たが、久しぶりにかうして壇上に立つてみると、當年私の爲めに奔走された顏が多數見えるのである。

又、之を左の樣にも歌つてみた。同調異工である。

八　同　其の二

鄉黨簡良委後人　南方建國抱經綸
兩回議政鹿曾逐　開落花關二十春

鄉黨の簡良は後人に委し、南方の建國經綸を抱く。
兩回の議政鹿曾て逐ひ、開落花は關に二十春。

南方が滿天下の視聽を集めることとなつて南進の先覺者が世の話題に上るに至つたことは當然であつて、我が菅沼貞風君の如き其の重なる一人であらう。君は明治廿二年、廿五歳の若さでヒリツピン獨立に協力し帝國の宏圖を南溟に展開せん爲め、マニラに航し、ホーセ、リザールやアギナルドとも交を締し、愈〻活動の機に入らんとして不幸惡疫の爲めに斃れた。君の死を去る十餘年、我が太田恭三郎君も亦志を抱いてルソンに渡り、後、ダバオに開拓の業を創めて今日の基を造つた。然かも君と同縣の自分は海興に關係することとなつて現地に航し、其の殖民開拓の適地たるを認め、同僚の群疑を排して、積極的援助を爲すこととし、財を投じ人を送つて、君の遺業を助成したのであつて、貞風君と此の點に就て全くの無緣ではない。

況んや令弟周次郎君は少年時代より舊知であり、交友五十餘年、周君は海軍少將を以て退職し、現に鎭西に於て教育に從事してゐる。此の兄にして此の弟ありと云ふべく、頃者大隈侯始め朝野有力者の提唱にて貞風顯彰會が成立せんとし、自分にも發起人の一員たらんことを求められ、固より之に快諾を與へたのであつて、二律と賦して貞風君を頌し周君に贈つたのであつた。

九　菅沼貞風君を憶ひ令弟周次郎少將に寄す　其の一

餘生不願老京華　殘骨唯好埋絕陲
名雋夙留南進句　遐洋今颺日章旗
盤空鶴健濤頭急　乘汐帆飛浪背夷
興亞同心君與我　幽明相隔護皇基

世界を見渡しつゝ

餘生願はず京華に老ゆるを、殘骨好し絶陲に埋むるに。
名嶌夙に留む南進の句、遐洋今は颺ぐ日章の旗。
空に盤るの鶻は健に濤頭は急に、汐に乘ずるの帆は飛び浪背爽かなり。
興亞同心君と我と、幽明相隔てて皇基を護らん。

興亞同心君と我と、幽明相隔てて皇基を護らんと云ふ結二句が眼目たるは言ふ迄もない。

又、大正十三と十五の兩年にマニラを過ぎて兩回共に貞風君の墓に展して英風を慕つたことを想出して、

十　同　　其の二

意氣軒昂日邊ニ歷　惜哉舉世不レ知レ賢
荷蘭屏剩肥洋嶋　瓊津津通赤道船
後五十年遺略熟　東三萬里宿圖宣
絶溟欲レ酹人何在　眞韮灣頭雨似レ煙

意氣軒昂日邊を歷し、惜い哉舉世賢を知らず。
荷蘭の屏は剩す肥洋の嶋、瓊浦の津は通ず赤道の船。
後五十年にして遺略熟し、東三萬里宿圖宣ぶ。
絶溟酹せんと欲す人何くにか在る、眞韮灣頭雨煙に似たり。

眞珠灣の九軍神の顯彰會で之を頌するの詩を寄せられたしとの發起者の懇囑に接し、突差に口を衝いて出たのが左の三首であつて、共に未だ句を成さず推敲を要するも試みに玆に揭げて端的に直情を眞寫することとした。讀者幸に笑ふ勿れ。

十一　眞珠灣九軍神　其の一

沉ニ身碧海ニ職司存　生豈所レ希勳不レ論
虜艦一殲徐自爆　千秋壯烈九忠魂

身を碧海に沈む職司存す、生豈に希ふ所ならん勳は論ぜず。
虜艦を一殲して徐に自爆す。千秋の壯烈九忠魂。

十二　同　　其の二

點塵不レ許　宛ニ戎衣ニ　遺恨十年全勇揮
殘月懸レ天天未レ曉　軍神一死決ニ軍機ニ

點塵許さず戎衣を涴すを、遺恨十年全勇を揮ふ。
殘月天に懸つて天未だ曉ならず、軍神の一死軍機を決す。
世界を見渡しつゝ

十三　同　　其の三

虐雪酷炎何敢辭　乾坤隨處飄二皇旗一
眞珠海底驚二鮫鰐一　自爆丹心一劍知

虐雪酷炎何んぞ敢し辭せん、乾坤隨處に皇旗を飄ゞ。
眞珠海底鮫鰐を驚かし、自爆丹心一劍知る。

十四　夢に家郷を憶ふ

離レ鄕五十有餘春　衰老愧吾混二路塵一
只喜鄕關多二舊識一　到レ今遠郭近村親

鄕を離れて五十有餘春、衰老愧くは吾が路塵に混ずると。
只た喜ぶ鄕關舊識多し、今に到つて遠郭近村親しむ。

報本反始は皇道の骨髓である。少年家鄕を出でて東奔西走五十餘年、衰老にして俗塵に混ずるは吾が耻なり、只だ喜ばしいのは鄕關の父老猶多く吾を知れることである。去月山川候補の應援に歸つて到るに當年の舊知と親しく相語つたことである。一夕夢に家鄕を憶ひ、祖先を思ひ、父母を慕ひ、家鄕の山川を偲んで、覺めて此の作あり。（昭和十七年六月四日認之）

贈られたる詩

十二首

先輩知友から、折に觸れて寄せられた詩は、隨時隨處に挿入さして貰つたが、尙ほ筐底に殘つて居るものが少くないので、此處に列記してその厚意を謝すことゝしたい。

まづ子雲白岩龍平君が、『續詩と人と境に』對して、左の二絕を寄せられた。

其の一　　子雲　白岩龍平（敬語略以下倣之）

一卷紀游詩百篇　米雲歐水織二風煙一
老而依レ舊四方志　卓犖欽君似二少年一

其の二

周二游大塊一訪二賢豪一　南亞當年拓殖勞
只有二先憂心尙耿一　卅年慣レ賦萬重濤

白岩君は對支先覺の一人で、貿易研究所の秀才として荒尾門下の高弟であり、私とは京都梁山泊時世界を見渡しつゝ

代共に螢雪の苦を積んだ仲間で、同文會創立後も永く理事長の職にあつたが、今日も理事として長老の一人である。私にとつては五十年來の先輩であり、舊知である。

樋渡盛廣君は、今奉天に在住して、鮮人教育に力を注ぎ、滿洲に於ける鮮人の施設に就て心を痛めて居る。彼は陸士第九期生の軍刀組であるが、大佐時代砲兵科の出身である彼は耳を聾して現役を去つた。私は明治四十年福島安正將軍と支那内地を歩いた時、同將軍に隨行せる樋渡少佐及び西大尉（後の大將）と面識になり、後、明治四十三年にはロンドンに於て屢〻相會した思ひ出がある。昭和十四年滿洲旅行の際、偶然同君が驛頭に來られたので、驚いたことであつた。歸京後、拙著を贈つたところ、左の三絶を寄せられた。

其の一　樋渡盛廣

雄渾氣魄掩二全篇一　吟唱綿綿將二曉天一
帶レ月舊蹤殘夢路　倫敦塔上霧濃邊

其の二

長江風月又英京　宇内周遊屬二舊盟一
偶爾相逢人未レ老　朔雲飛斷瀋陽城

其の三

卓犖雄豪豈幾生　慨然空抱策縱横
唯期養士多年後　共拓崑崙萬里程

第二詩に『長江風月又英京』といつたのは支那大陸に遊び共に長江を下つたこと、ロンドンで互に大に語つたことを想起したのであらうが、私にも懐しい思ひ出である。彼は耳聾の爲め大將にはならなかつたが、退いて鄕里の模範村長となり、青年學校を創設し、更に進んで半島同胞の爲め有意義な活動を續けて居るのであつて、其の士を養ふ熱烈な精神は敬服に値するものが多い。切に彼の自愛を祈る次第である。

小松謙堂君は荒尾崇拜者の一人で、先生を顯彰するに就て、あらゆる機會に努力せられて居る篤志家である。前卷に於ても彼の長篇を掲げて置いたが、又拙著『續詩と人と境を讀む』の一篇を寄せられた。

小松謙堂

有レ時載レ筆赴二滬江一　有レ時乘レ機向二南邦一
或遊二英佛一又北米　游蹤歷歷意氣尨
君謂漫遊吾本領　米山歐水試二馳驄一
又謂人豈安二舊居一　無礙自在吾心境
世界を見渡しつゝ

隨所賦レ詩隨所酬　萬里鵬程筆底收
欝勃吟懷遣二何處一　足蹤遍印六大州
居常裁レ詩幽情叙　風月雲水是君侶
淺間之山熱海濱　有レ閑悠悠臥二別墅一
湘南春酣息心莊　信嶺夏寒恰恰堂
此中盡日何收レ爲　仰レ雲俯レ水養二心腸一
朝向二高原一蹈二野草一　夕對二短棗一耽二風藻一
淹留幾旬樂融融　逍遙自適不レ知レ老
叙來遊蹤詩百篇　收得歴歳幾山川
有レ客問君漫遊事　笑而不答似二斯編一

半島の伍莊君よりも亦讀後の感を寄せられた。

伍　莊

世界周游歴二五回一　軍人氣魄學人才
詞章餘事横レ刀嘯　無限詩魂入二酒杯一

中田敬義翁も拙著に對し、左の二絶を贈られた。

中田敬義

其の一

歴二寛寰瀛一已七周　遑遑爲レ世悉二心謀一
四方原是男兒事　奉レ國奚惟簪弁儔

其の二

渡海幾爲二觀國賓一　買レ山時與二白雲一隣
讀二君行紀一頻移レ興　乍對二勞人一乍逸人

動篇第一、『燕山吳水』の中に、無劍渡邊千冬君を弔ふの一律を掲げて置いたが、本日、圖らずも『詩林』上にて、彼が印度洋上私に贈つた五絶が載つてゐるのを見た。成る程、先年彼と船を同じうしてナポリより神戸に歸つたが、印度洋で此の詩を贈られたことを思ひ出すのである。彼は歌もよくするのであるが、詩作は久しぶりとのことであつた。

印度洋上似二井上梧堂一　渡邊無劍

秋風吹二海上一　歸客惹二新愁一
問レ鵠爾知否　黯雲何日收

而して今やその人無し。四十餘年來の舊友を憶ふて特に是を掲げて置く。

舊友といへば、今鎌倉に隱棲して居る啓山、村井啓太郎君も亦其の一人である。彼とも學生時代か

らの交遊で、東亞同文會創立匆々、派せられて私は上海に赴き、彼は北京に赴いたのであるが、其の後彼は朝日の特派員となり、轉じて滿鐵地方課長となり、更に轉じて滿洲銀行頭取となり、大連市長となり、在滿支約四十年に及ぶ士であるが、一昨年内地へ歸還した。彼が鎌倉に隱棲の居を卜した際、私に示したのが次の一絕である。

村井啓山

明發人忙客過遲　眼前失脚破顏時
移レ居漸覺琴書穩　剝啄驚レ君應レ有レ期

半島の權寧國君の嚴父、文山老より近頃左の律を寄せられた。

權文山

生不二偶然一眞丈夫　優遊船轍遍二寰區一
林宿花斟收二傑句一　風驅雷動抱二宏圖一
行藏只信中心得　舉措思將隻手扶
稽公素志高如レ許　愧此窺閭臥レ病軀

（昭和十六年四月二十五日認之）

追加

本書を『凸版印刷』の工場に送つてから季早くも、秋に入つて息心海莊に神を養ふこと兩回、秋雨の夕、清爽の晨、感に觸れ機に應じて五言律十五首を獲た。思想單調、吐囑一律なるも各々其の志を直寫せるもの鷄肋棄て難し、乃ち玆に追記する次第である。

息心海莊

其の一、飛似毬

功名付兒輩　富貴阿誰求
昨賞炎南月　今迎荳北秋
干戈何日偃、宿志幾時酬
浴罷凭レ欄坐　冥鴻飛似毬

功名兒輩に付し、富貴阿誰に求めん、
昨日賞す炎南の月、今は迎ふ荳北の秋、
世界を見渡しつゝ

干戈何の日か偃む、宿志幾時か酬ん、
浴罷んで欄に凭つし坐せば、冥鴻飛んで毬に似たり。

其の二、秋雨夕

落葉打二虚檐一　當レ窓鳥影單
班超徒撫レ劍　康頗空加レ餐
曝レ眼列邦史　焦レ心祖國安
海莊秋雨夕　古道照レ顏寒

落葉虚檐を打ち、窓に當るの鳥影單なり、
班超徒に劍を撫し、康頗空に餐を加ふ、
眼を曝らす列邦の史、心を焦がす祖國の安、
海莊秋雨の夕、古道顏を照らして寒し。

功名富貴は人の欲する所、求むる所に委せ、昨春南方の月を賞したと思へば、今は荳北の秋を迎へるの身である、干戈四海に滿ち、興亞の宿志は幾時にか酬ゆるものぞ、浴後、欄に凭つて靜坐すれば、冥鴻は飛んで毬の樣であるとて圖南の夢を追ふのが『其の一』であり。班超が徒に劍を撫して歎じ、康頗が空らに餐を加へて猶ほ爲すあるを示さんとしつゝある、頽齡猶ほ眼を列國興亡の跡に曝らし、心を祖國の安に焦がしてゐる、此の夕、海莊秋雨蕭々たり、只だ古道の顏を照らして寒きを覺ゆと云ふのが『其の二』である。

佐藤一齋先生曰く

少にして學べば壯にして爲す所あり、壯にして學べば老いて衰へず、老いて學べば死して朽ちずと、私は老いて學んで死して朽ちざらんと欲するのみ。

其の三、救二亞洲一

乾葉梧桐墜　打レ窓疑二雨聲一
忘レ身念二先靜一　去レ我夢方情
獻レ國千年計　征レ夷百萬兵
終霄思無レ盡　誰救二亞洲一

乾葉梧桐墜ち、窓を打つて雨聲かと疑ふ、
身を忘れて先靜を念とし、我を去つて夢方に清し、
國に獻ず千年の計、夷を征す百萬の兵、
終霄思ひ盡くるなし、誰か亞洲の困を救はん。

秋に入つて枯葉窓を打つ、恰かも雨聲かと疑はるるの時、思は緬々として盡きない、誰か亞細亞十

億の生民を救ふものぞ。

其の四、息心銘

壹山風颯颯　湘海氣泠泠
皦薄露凝白　葛長苔競青
南天騁神滸　北牖息心銘
境靜纖塵絶　靜中虛籟聽

一　壹山風は颯颯たり、湘海氣は泠泠たり、
皦は薄く露白を凝らし、葛は長じて苔青を競ふ、
南天神を騁するの滸、北牖心を息むるの銘、
境靜にして纖塵絶へ、靜中に虛籟を聽く。

海舟勝先生曰ふ『以無心息天下之爭心』と此の一軸、懸けて海莊の壁間に在り、仍つて息心海莊と命名したことは曾て披露した所である。此の日、風颯颯、氣泠泠たる壹山の湘海に面する海莊に靜居して、想を南天の滸に騁せ、靜かに息心の銘を念ずれば、境は靜にして纖塵絶へ、靜中に虛籟を聽取するのであつた。

其の五、雙樟庵靜坐

雙樟聳二後庭一　樹下靜思宜
出レ俊狗屠輩　隱レ隴帝王師
行藏常有レ度　進退固無レ私
超脫死生境　坦然大道夷

雙樟後庭に聳へ、樹下靜思に宜し、
俊を出す狗屠の輩、隴に隱る帝王の師、
行藏常に度あり、進退固と私なし、
超脫す死生の境、坦然として大道夷なり。

息心海莊に一庵あり、雙樟蟠蟠として聳ゆ、依つて庵を雙樟と名づく、樹下に靜思せば神は自ら天地有形の外に馳せ、思は風雲變態の中を繞るのである、淮陰侯韓信は狗屠の輩より起り、諸葛武侯は隴中に吟じて三顧に感激して帝王の師となつた。男子の行藏には常に度あるべく、人間の進退は固より自己の私に出づべきでない。死生の境を超脫せば、大道は坦坦として夷かに長安に、通ずるのであつて、進退行藏の如き何等の累とならないのである。

其の六、徐氏國大使玉韻に次し、思を尊大人徐勤先生に寄す

四海紛且擾　千秋誰立レ言
世界を見渡しつゝ、

波心沈二毅魄一　沙裏沒二雄魂一
旄節君身重　布衣吾道尊
夙叨爾汝誼　徐氏一家門

四海紛且つ擾、　千秋誰か言を立つ、
波心に毅魄を沈め、沙裏に雄魂を沒す、
旄節君が身重く、布衣吾が道尊し、
夙に叨にす爾汝の誼、徐氏一家の門。

中華民國駐日徐良大使、曩に平沼特使一行と回國に當り紫山川崎老に寄せられた、曰く

奉レ命將レ歸レ國　偷レ閒寄二一言一
中秋仍苦熱　明月最銷魂
立レ德君眞貴　安レ貧我亦尊
雙親倚レ閭望　夢寐到二津門一

其の言平易、其の情眞摯、特に大使が天津に在る雙親に向けらるる純眞な孝心は結二句に顯はれてゐる。筆者は尊大人徐勤君とは東亞會創立當時からの締交で共に東亞の大局を憂ひ中日の提携を計つた間柄で、四十餘年に亘り爾汝の誼を締した仲であるので、之に次して此句を賦し『夙に叨に爾汝の誼、徐氏一家の門』と結んだのである。

其の七、飛二日邊一

南方建國業　忘老志逾堅
禽鳥陰晴囀　花英朝暮鮮
乾坤侔二旅寓一　大地小レ於レ拳
鵬摶向何處　夢魂飛二日邊一

南方國を建つるの業、老を忘れて志逾々堅し、
禽鳥陰晴囀り、花英朝暮鮮かなり、
乾坤は旅寓に侔しく、大地は拳よりも小なり、
鵬摶何の處にか向ふ、夢魂日邊に飛ぶ。

南方建國に志してより早や三十餘年、老いて志は逾々堅く、乾坤は旅寓の如く、大地は拳よりも小さい、近く何の處に向つてか鵬摶を試む可き、夢魂は日邊に飛ぶと云ふので、句を成さざるも、詩は志なりで、讀者の諒を仰ぐのみ。

其の八、志業遼
秋宵入海屋　四顧几牀寥
世界を見渡しつゝ

追加

枯葉無レ風墜　巨松擧レ手招
卯童慕二太閤一　衰鬢憶二班超一
一笑六旬夢　百年志業遼

秋宵海屋に入れば、四顧せば几牀寥、
枯葉風なくして墜ち、巨松手を擧げて招く、
卯童太閤を慕ひ、衰鬢班超を憶ふ、
一笑す六旬の夢、百年志業遼なり。

之も梧堂式と申すべく、秋の夕に海莊の人となれば四望の風光極めて幽寥で、庭前の枯葉は風なきに墜ち、庭後の巨松は枝葉森々、手を擧げて招くが如くである、惟ふ幼童の時には豐太閤を慕つて母にねだつて背中に「豐太閤」の三字を絲で縫着けて貰ひ家康始め賤ヶ嶽七本槍の勇士を合せて八人の家來を各同窓の友に命名し、自ら大將となつて校中校外を濶歩したことを、又中年、南方建國を志して、南阿の英雄セシル、ローヅの南アフリカ會社に因んで、南アジヤ會社卽ち南亞公司なる會社を起して、開拓の業を創めたことを、卽ち衰鬢猶ほ班超を憶ふのであるが、回顧すれば此等六十年の夢も實現は容易でない、幸に皇軍の武威に依つて南北一萬キロ、東西八千キロの太平洋の領域は皇風に靡きつゝあるとは云へ、之が恒久の建設、聖業の完遂は容易でない、百年志業遼かなりであつて、死して止まざるの概を以て今後と雖も涓滴の誠を致さなければならぬのである。

其の九、煮銀鱸

秋雨敲レ窓急　爽涼欲レ擁レ鑪
心神傾二拓殖一　終始事二馳驅一
志大任二人謗一　才疎笑二我迂一
好俟二天定日一　置レ酒煮二銀鱸一

秋雨窓を敲いて急に、爽涼鑪を擁せんと欲す、
心神拓殖に傾け、終始馳驅を事とす、
志大にして人の謗るに任せ、才疎にして我が迂を笑ふ、
好し天定まるの日を俟つて、酒を置いて銀鱸を煮ん。

秋雨窓を敲いて急に、爽凉の氣、火鑪がほしい心地がする、一生を拓殖に傾けて大和民族を世界に播布せんとして營々天涯に馳驅して來たが、志徒らに大なるも、才疎にして何等就す所もなくして道途に老いんとしてゐる。好し終世の志業を一擲して天定まるの日には此の海莊に閒居し、酒を汲み銀鱸を煮て晩年を送りたいものだと云ふのである、故態依然吾れ自ら笑ふに足る。

其の十、征二南寰一

世界を見渡しつゝ

追加

四海干戈滿　相逢劍戟間
生民敵二王愾一　億兆耐二時艱一
酬レ國拋二身命一　忘レ家誅二羌蠻一
秋高氣爽日　又欲レ征二南寰一

四海干戈滿ち、相逢ふ劍戟の間、
生民王の愾に敵し、億兆時艱に耐ふ、
國に酬いて身命を拋ち、家を忘れて羌蠻を誅せん、
秋高氣爽かなるの日、又、南寰を征せんと欲す。

今や四海には干戈滿ち、御互に劍戟の間に相逢つてゐる、吾々生民は王の愾に敵し、一億一心時艱に耐へつゝあるのである、身命を拋つて國に酬ゐ、羌蠻を誅して家を忘るゝは、皇民の無限の感謝でなければならない、秋は高く氣も爽かである今日此の頃、吾も又南寰に征かんとしつゝあるのである。

其の十一、細雨不レ勝レ秋

志業何時就　傾レ杯掃二隱憂一
夜深人語絶　燈冷虫聲愁
東亞麗二皇旆一　南方展二帝猷一

三更眠巨得　細雨不勝秋

志業の何の時にか就らん、杯を傾けて隱憂を掃ふ、
夜深ふして人語絶へ、燈冷かにして虫聲愁ふ、
東亞皇旆に麗き、南方帝猷を展べん、
三更眠り得巨く、細雨秋に勝へず。

さればと言つて志業は何の時にか就るべき、海莊に獨居して夜も更ければ人語も絶へ、燈火冷かに虫の聲にも愁を帶んでゐる、東亞に皇旆麗き、南方に帝猷を展ぶるは容易ではない、思ふて玆に到れば眠りも得がたく、折柄の蕭々たる細雨は人をして秋に勝へざらしむるものがあるのであつて、深更國を憂ふるの一時の實感を直寫したに過ぎない。

かかる時には思は更に轉じて身邊に及ぶものである、フト遙かに兩兒の遠く天涯に在るのを想つては突差に次の句が湧いて出た。

其の十二、遙かに兩兒に寄す

骨肉東西別　一家如二轉蓬一
女留吳尾市　男住北歐空
親喜誇二淸健一　兒期立二大功一

世界を見渡しつゝ

海莊秋雨夕　裁レ信　托二征鴻一

骨肉東西に別れ、一家は轉蓬の如し、
女は留まる吳尾の市、男は住む北歐の空、
親は喜ぶ清健に誇るを、兒は期すべし大功を立つるを、
海莊秋雨の夕、信を裁して征鴻に托せん。

長男はベルリンにゐたが、軍屬となつて曩にストツクホルムの武官室に勤務してゐる、最近にも大元氣で奉公に勵んでゐる旨の飛電に接した、次女は其の夫と共に兒を擁して吳尾の市卽ち上海に住んでゐる、由來吾が一家は轉蓬の樣に天涯に流浪して來たもので、何も意に介する所はないのみならず、吾等兩親は極めて壯健で、夫れ相當に職分に應じて奉公してゐる、汝等は須らく奮勵努力して大功を期せなければならぬ、此夜秋雨頻りに、遙かに兩兒を憶ふて寸書を裁して征鴻に托すと云ふのである、之も親として子を思ふの一時である。

其の十三、獨　豁レ　襟

秋晏青一色、旭日射二寒林一
讀レ史懷二英俊一　煮レ茶養二素心一
光華殊域遍　雨露聖恩深

立二國炎南一夢　醒餘獨豁レ襟
秋晏青一色、旭日寒林を射る、
史を讀んで英俊を懷ひ、茶を煮て素心を養ふ、
光華は殊域に遍く、雨露聖恩深し。
國を炎南に立つるの夢、醒めて後獨り襟を豁く。

秋雨の夜は明けて天快晴、空に一點なく、青一色で、旭日が寒林を照らしてゐる、如何にもすがすがしい秋日和である、そこで史を繙いては英俊の偉勳を懷ひ、茶を喫しては萬古渝らざるの素心を養ふのである、今や光華は遠く殊域の空に遍く、雨露の聖恩は南溟數億の民生の上に霑つてゐる、思へば三十餘年前の筆者炎南立國の夢も、稜威の致す所、今や成らんとしてゐる、愉々快々の情は特に筆者に深く、醒めて後獨り襟を豁くのも亦た已むを得ないではないか。

其の十四、送二　我　還一

天晴無二點翳一　風死白鷗閑
伸レ脚青苔上　停レ筇紅葉間
梯航五洲小　風雪二毛斑
天暮荳山路　蟲聲送二我還一

世界を見渡しつゝ、

天晴れて點翳なく、風死して白鷗閑あり、
脚を伸ばす青苔の上、節を停む紅葉の間、
梯航五洲小に、風雪二毛斑なり、
天暮れて荳山の路、蟲聲我が還るを送る。

この秋天一碧の好日和に海莊に蟄居すべきではない、午後門を出でて紅葉の間を過ぎ、青苔の上に横臥して天地と一體となつた、惟へば五大洲を七回も巡つて、その小なるを覺ゆるのであるが、六十餘年の風雪を凌いで來ると、鬢上の二毛も白點々である。屋後の荳山に在る體育ホテルに小憩してビールの一杯を傾け、日暮に下つて來ると、蟲聲は唧々として我が還るを送るのである、固より實況實感である。

其の十五、神宮外苑の國技を拜觀す

戰捷祥無限　禾豐率土園
苑中菊花馥　瑤樹錦旗翻
十萬競長枝　一齊泣聖恩
事終拜回輦　瀛氣塞乾坤

戰捷つて祥限りなく、禾は豐かなり率土の園、
苑中菊花馥り、瑤樹錦旗翻る、
十萬長技を競ひ、一齊聖恩に泣く、
事終つて回輦を拜し、瀛氣乾坤に塞がる。

明治節に先づ一日、神宮外苑に於て國民練成大會が催され、兩陛下御親臨の下に數萬の大衆の競技があつた、筆者も特別來賓の席を與へられたので、拜觀して感激に浸つたのであつた、國民體操の一時の如き十萬の老幼男女が一人の如きに振舞し、又　兩陛下を奉迎送する際の萬歳の聲の如き、正しく天に響くが如く、大和民族が稜威の下、聖業の完遂に一路邁進するの氣魄が溢れてゐて、實に瀛氣乾坤に塞がるの概があつたのである。

高秋、息心海莊の五律十五首は以上の如く千篇一律で、詩としても其の體を成さざるもの多く、自らを耻づる次第なるも、由來詩は志なりで、隨感を直に蕪詩に據べて天に訴へたるもの、大方の笑は固より甘受する所である。

海内煙霞三首

其の一、關西講演途上過二關原一

雲披治部舊丹心　迎送英雄叱咤岑
世界を見渡しつゝ

窓外豐禾疑二列幟一　快看殘月射二疎林一

雲は披く治部の舊丹心、迎送す英雄叱咤の峯、

窓外の豐禾列幟かと疑ひ、快看す殘月の疎林を射るを。

秋に入つて或は大阪に或は名古屋に招に應じて講演に赴いた、夜行の列車に投ずれば、天明けて必ず關ヶ原の古戰場を弔ふのであつて、何時も詩想が湧くのであるが、此の時は石田三成の志を遂げ得ず、老獪家康の致す所となつたことを憐むと共に、今や秋高くして稻浪黃を呈し、豐禾の穰々として民に鼓腹の情あるを喜んで快く殘月の疎林を射るのを看たのであつた。

其の二、長良川晚眺

枕水樓高俯二碧坡一　帶川巒翠接二清沙一

話殘客散凭レ欄處　眼底秋酣爽意加

枕水の樓は高く碧坡に俯し、帶川の巒は翠に清沙に接す、

話は殘し客散じて欄に凭るの處、眼底秋は酣に爽意加ふ。

十月の中頃、岐阜に赴き講演終つて長良川に鵜飼の技を覽、入つてホテルの最高樓に上り、客散じて欄に凭つて四望せば、樓は高く碧坡に俯し、眼前の巒は翠に川水は碧、然かも皚皚たる清沙に接してゐる、何とも云へぬ好風光である、今や秋も酣に爽意一倍加つて來る、好し、客散じて一浴せんかである。

其の三、水鄕斟月

彷彿炎南水一隈　月從二波際一照二樓臺一

團團玉鏡無二纖翳一　瀲灩誰傾大玉杯

彷彿たり炎南の水一隈、月は波際より樓臺を照らす、

團團たる玉鏡纖翳なく、瀲灩誰か傾く大玉の杯を。

本年の仲秋は絕好の日和に惠まれた、品海の旗樓に上れば月は波際より樓臺を照らして炎南の水一隈に彷彿たるものがある、胸には芥蔕を絕ち、宇は遍く玲瓏たり、志は南天に在つて、手から艦船に掉さんと欲す、丈夫國に許し、意氣雲を凌ぐの概あるを覺ゆるのである。故態吾れ自ら笑ふべし矣。

（昭和十七年十一月十日追記）

民族政策研究所設立趣旨

井上

皇紀二千六百年は皇國躍進の年、八紘一宇の理想顯現の年であり、又世界歴史の轉換、東力西漸の機會でもある。一億の民生は克く自戒自肅して自力を養ひ自疆息まず、以て上、聖明に答へ我が享天の命運を拓開しなければならぬ。

惟ふに之を爲す如何、宜しく内に我が民族の本質を窮め、長短を明かにし、民族精神の作興が興國の前提たることを確認し、外には之を史蹟に稽へ現在に徴し、各國家各民族興亡盛衰の因つて來る所を檢討して、其の長を採つて己の短を補ひ、自らに資すると共に、他と接觸し、折衝し、綏撫し、統制し、克く我に嚮向し、景仰し、融和し、歸服せしむるの妙諦要義を知悉する所がなければならぬ。

然かも之を心會體得して善斷善處しなければならぬ。

首を昂げて古今に察し、宇宙に觀る。漢唐の長征は如何の功過ある。遼、金、元、清の中國統治は如何。華僑の進出は何に因する。更に西に轉じて過去三百年に亙る西力の東漸は如何にして行はれたる。白人の過去の世界制覇は如何。就中、日沒せざるの國大英は如何にして成れる。然かも今の衰勢は何に因る。西、葡、佛、蘭、露、墺、匈、白、等の對民族策は如何、米の汎米政策は奈何。其の黒

人策は何の狀ぞ等々、苟くも古今東西に國を立てて雄を四方に稱へたるものの民族政策は好個の鑑戒と資料を我に提示せざるはない。現前に見る獨逸の飛躍は『世界の歴史を支配するものは民族政策である』と喝破して同民族の結束と血の醇化に精進するヒットラーに率ゐらるゝが爲めならざるか。殷鑑昭々として心肝に徹するものがあるではないか。

翻つて皇國に見る、皇國は夙に臺灣を收め、樺太南半を領し、朝鮮を合せ新に盟邦滿洲國を建てて、餘力支那大陸に伸び、國府新中央政權を助けつゝ東亞新秩序の建設に乘り出し、更に歐洲戰局の急轉を契機として佛印、蘭印の歸屬問題が眼前に展開するに至つて、我が共榮圏は東亞より南亞に擴大して、我が東南亞に於ける盟主權は茲に確立せんとしてゐる。次に起るは全亞細亞の解放であり、興亞の體制完遂である。此の秋に當つて何よりの急務は、列國の民族政策に新なる檢討を加へ之を科學的に解剖し、綜合的研究を竭し正しき認識を我が國民に與へることである。弱冠・志を興亞に立てて、屢々萬國を周遊し、又世界の隨處に開拓の業を勵めて拮据四十餘年、普く各民族と接觸して、其の長短、巧拙、略々得る所あり。而して今や遲暮に臨んで猶ほ何を爲すべきか。何を以て世を益し、後に貽すべきか。自己の體驗を經とし、新しき研究を緯とし、立言立行することも尤も重要なる任務の一でなければならぬ。

乃ち茲に少數同感の士と謀り、民族政策研究所を起して世の急需に應じ、興亞の聖業に涓滴の誠を致すと共に、自己の殘年を徒爾に終らしめざらんことを希ふ次第である。事に順序あり、物に本末あり。宜しく小より大、粗より精、雜より純に入るべし。

幸に廣く天下同憂の人を獲、年を追ふて研究の擴大振張を計り、目的の完遂を近き將來に期せんとす。之を以て設立の趣旨と爲す。

紀元二千六百年晩夏の一日

輕井澤恰恰山莊に窓外の鶯聲を耳にしつゝ

井上雅二識

同研究所主要研究事項

一、民族及民族政策ニ關スル理論的研究（特ニ民族興亡理論）
二、民族ノ特質ニ關スル研究
三、民族政策ニ關スル歴史的研究（民族運動ヲ含ム）
四、世界主要國ニ於ケル現在ノ民族政策ニ關スル研究

備考

同研究所主要研究事項

同研究所主要研究事項

一、以上ノ諸研究ハ社會學、經濟學、人種學、地理學、生物學、社會衛生學、其ノ他關係諸科學ノ各分野ニ於テ研究ヲ遂グルトトモニ之ヲ綜合的ニ考察シ皇國民族政策確立ノ基本資料タラシメントス

二、以上ノ諸研究ハ特ニ亞細亞ニ於ケル諸民族及民族政策ノ研究ニ重點ヲ置タ

―井上雅二著海外發展に關する書―

1 支那論（明治卅二年）東亞同文會
2 中央亞細亞旅行記（明治卅六年）民友社
3 モーリス氏植民史（譯述）（明治卅七年）新聲社
4 埃及に於ける英國（明治四十年）東亞同文會
5 大陸游草（明治四十一年）日韓圖書會社
6 巨人荒尾精（明治四十三年）東亞同文會
7 四大陸遊記（明治四十四年）民友社
8 獨逸に於ける植民地經濟と本國產業（明治四十四年）農商務省
9 セシル・ローズの私生涯（明治四十四年）實業之日本社
10 南洋（明治四十五年）富山房
11 平民宰相原敬（大正十年）三松堂
12 改造途上の世界（大正十二年）民友社
13 西半球を巡りて（大正十五年）民友社

14 海外雄飛 若き日本の進路（昭和四年）民友社
15 世界を家として（昭和四年）博文館
16 移住と開拓（昭和五年）日本植民通信社
17 海外移住問題の實際（昭和六年）日本植民通信社
18 詩と人と境（昭和九年）實業之日本社
19 三たび友邦ブラジルを訪ねて（昭和十年）實業之日本社
20 山莊獨語（昭和十一年）非賣
21 新に南方を巡りて（昭和十二年）非賣
22 大日本の進む路（昭和十三年）實業之日本社
23 興亞一路（昭和十四年）刀江書院
24 續詩と人と境（昭和十四年）一路書院
25 往け南は招く（昭和十五年）刀江書院
26 南進の心構へ（昭和十六年）刀江書院
27 南方開拓を語る（昭和十七年）畝傍書房
28 亞細亞中原の風雪を望んで（昭和十七年）照文閣

世界を見渡しつゝ

昭和十八年二月二十日印刷
昭和十八年二月二十五日發行
（初版八〇〇部）

定價五圓

著者 井上雅二（うのうえまさじ）

發行者 東京市神田區駿河臺三ノ六 尾高豐作

印刷者 東京市下谷區二長町一 凸版印刷株式會社 山田三郎太（東東一二二）

發行所 東京市神田區駿河臺三ノ六 刀江書院 電話神田三一八九・三二七一 振替東京七三一一八 文協會員番號 一二〇五二〇

出文協承認あ二六〇〇六二號

配給元 東京市神田區淡路町二ノ九 日本出版配給株式會社

刀江書院刊

井上雅二著	興亞一路	價 二・五	送 〇〇
井上雅二著	南進の心構へ	價 二・八	送 〇〇
井上雅二著	往け南ば招く	價 一・八	送 五〇
永見七郎著	興亞一路 井上雅二	價 一二・〇	送 五・四
井上民族政策研究所編	民族政策と南方の人口問題	價 一・〇	送 〇〇
竹井十郎著	南方民族と政治對策	價 一・〇	送 〇〇
三吉朋十著	パラワン チモール セレベス 探檢記	價 三・五	送 〇〇
井出季和太著	支那民族の南方發展史	價 三・〇	送 〇〇

3654
35

終